

## 潜伏命題名詞句再考

### —N-意味理論の分析の批判的検討と指示参照ファイル理論による分析—\*

山泉 実

キーワード：潜伏命題名詞句 指示参照ファイル理論 N-意味理論

#### 要旨

名詞句意味論・語用論の現行パラダイム N-意味理論に代わる新しい理論として指示参照ファイル理論を提案した。N-意味理論は、「ドアの幅が脱出を妨げた」の「ドアの幅」のような名詞句を潜伏命題名詞句と呼び、その変項が充足された命題関数（例えば、[N はドアの幅だ]）を表すと主張する。指示参照ファイル理論を概説した上で、この説明の問題点を指摘した。そして、潜伏命題名詞句は、指示参照ファイルの特質か関係性でその値が定まったもの（例ドア [幅：30 cm]）に対応し、それが因果作用を表す述語の原因項になっているため、強制によって、命題ではなく因果的力を持つ事実を表すと特徴付けた。潜伏命題名詞句は、「30cm」のような値の表現と共起することが可能なものがある。他の多くの構文にも見られるこの可能性は、名詞句が独立したファイルに対応しないことと相関していることを示した。最後に、名詞句が独立したファイルに対応する場合に、なぜその値を明示することができないのかを議論した。

#### 1. はじめに：名詞句意味論・語用論研究のパラダイムとしての N-意味理論

本稿は、潜伏命題名詞句（concealed proposition noun phrase、CPNP）と言われる名詞句を事例として、2つの名詞句意味論・語用論の理論の分析を比較対照し、CPNPを提起したN-意味理論（西山2003, 2013, 西山・西川2018他）の分析に対して、指示参照ファイル理論（Reference File Theory、以下RFT、山泉2019, 2020b, c, 2021a, b, 近刊, Yamaizumi 2019）の分析の優位性を主張する。その過程で、CPNPについての新事実の提示・分析も行う。以下、まずは2つの理論を紹介する（1節、2節）。続いて、N-意味理論のCPNPの分析を紹介した後、批判的に検討し（3節）、RFTの分析を示す（4節）。

CPNPを分析した西山（2013）の枠組み——「N-意味理論」（西山2019a）と呼ばれている——は、西山（2013）の著者らを中心に1980年代半ばから推し進められているもので、天野・三宅・大木の鼎談（2019）で指摘される通り、近年日本において盛んな名詞句研究に大きな影響を与え続けている。

---

\* 本稿は、基礎言語学研究会 論文草稿合評会（2021年5月1日、オンライン）で議論した草稿を書き改めたものである。そこでコメントをくださった方々、特に田中太一氏、西山佑司氏、及び査読者の内山拓氏、氏家啓吾氏に深く感謝する。本研究は、科学研究費（課題番号：17K17842）の助成を受けて行われている。

る（詳細は上記文献参照）。分析概念として、変項名詞句、指示的名詞句、叙述名詞句、値名詞句といった名詞句の意味機能による分類や、飽和名詞・非飽和名詞、譲渡可能名詞・譲渡不可能名詞といった意味による名詞の分類などが特に広く知られている。これらの概念によって、複合的名詞句「NP の NP」、潜伏疑問文、各種コピュラ文、各種存在文等の言語表現が分析されている。N-意味理論では、語用論についても関連性理論（スペルベル&ウィルソン 1995/1999 など）に立脚しながら、名詞句の自由拡充（峯島 2013）、アドホック概念構築（梶浦 2013）などが研究されている。本稿の主題である潜伏命題名詞句を広く知らしめたのも N-意味理論である。

上で述べた様々な現象の分析に用いられる N-意味理論は、パラダイム——1 つの定義では、研究者集団の「成員によって共通して持たれる信念、価値、テクニックなどの全体的構成」<sup>1</sup>（クーン 1970/1971: 198）——である。N-意味理論による通常科学的研究、「パズル解き」の典型例としては西山（2020）が挙げられる。高度に専門化したこの研究が有力な学術誌に掲載されていることから、N-意味理論は、この名称こそ広く知られていないとしても、日本の言語学界において名詞句研究の最も整備されたパラダイムとして確立していると言えよう。

一般に、通常科学においてうまく処理できないことは変則事例（anomaly）と言われ、パズル解きによって解決が目指される（クーン 1970/1971）。変則事例が蓄積し、パラダイムへの信頼がゆらぎ始めると、その科学は危機に陥る。初めは単なるパズルに見えていたものが、なかなか解決できずに蓄積してくると、次第にパラダイム修正の必要性が感じられるようになる。CPNP は、潜伏疑問名詞句（山泉 2021a）、“変項名詞句”の階層（山泉 2021b）、名詞句の“自由拡充”（山泉 2019）等と並んで、N-意味理論を危機に陥らせるそのような変則事例の 1 つと筆者は考えている。

危機下においては、研究者を新たなコミットメントと科学の実践の基礎に導く異常科学が行われる（クーン 1970/1971: 7）。そこでは、「新しい基本からその分野を再建すること」が行われ、「その分野の最も基本的な理論的前提」の変更が試みられる（p. 96）。そのため、異常科学は哲学的考察を多分に含むこと（p. 100）が科学史に多く見出されている。そのような変更を伴う名詞句意味論・語用論の新たな枠組みとして RFT を提唱する以下の議論も同様に哲学的考察を多分に含む。

## 2. 指示参照ファイル理論：名詞句意味論・語用論研究の新パラダイム

RFT は、言語を可能にする心の仕組みを探るという心理主義（mentalism）の立場を、N-意味理論を含む生成文法、さらには認知言語学などと共有するものの、N-意味理論の技術的な修正にとどまらない別個の理論であるため、以下ではその背景から説明していく（理論の基盤の詳細については、山泉 2020b, 2020c を参照）。以下で述べること全てが、CPNP の議論に直接関係するわけではないも

---

<sup>1</sup> マスターマン（1970/1990）は、クーン（1970/1971）における「パラダイム」が、大きく分けて 3 つ、細分化すると 21 の意味内容を持つとしている。これらは、筆者の見るところ、認知言語学で言うところのフレームを共有するメトニミー的多義の関係にあると考えられる。本稿の「パラダイム」にもその多義性が見られるかもしれない。

の、理論の全体像無しには、RFTによるCPNPの分析を理解することは難しいため、直接関係しない部分にも言及することにする。

## 2.1. 指示参照ファイル理論の基盤：言語観・コミュニケーション観・認知観

人間が名詞句で対象を（語用論的に）指示するとき、言語使用者の心において対象に対応する心的表象が、指示に使われた表現（の心的表象）と結びつくと考えられる。その際、ワーキングメモリに対象に対応する心的表象が構築される。指示参照ファイル（RF）はこの心的表象である。この用語はジャッケンドフ（2012/2019）に由来するが、RFTはその内実を精緻化して、名詞句の意味論・語用論に関わる現象の記述・説明に利用する。もともと、RFは対象を視覚的に認識・追跡する際など、言語による指示以外にも使われていると考えられる認知的構築物であり、RFTの適用可能範囲も言語の分析にとどまらない（例 山泉 近刊）。

RFTは、関連性理論に基づくスコット＝フィリップス（2015/2021）の言語進化のシナリオに立脚し、言語の固有機能<sup>2</sup>は話し手の思考のコード化ではなく、意図明示-推論コミュニケーション（ostensive-inferential communication、OIC）の強化であると考えられる。OICは、コードモデルでは適切に記述できないもので、発信者は自らの伝達意図・情報意図を受信者が推論できるように意図の証拠を提示し（意図明示）、受信者は、意図の証拠とコンテキストを元に、発信者の情報意図を推測する（推論）。コンテキストとは、発話場面、言語的文脈、世界などについての知識で、しかもコミュニケーションにおいて話し手・聞き手の心で利用された想定のこと、会話の相手が何を知っていて何を知らないかや、何をしようとしているかなどの想定も含む。コンテキストは、話し手が聞き手にとって適切な意図の証拠を作り上げる際にも重要な役割を演じる。OICの機能は、話し手にとっては聞き手の心的状態を操作して環境を自分の都合よく改変すること、聞き手にとっては話し手の意図を読んで有益な情報を得ることである。会釈や含み笑いが示すように、OICをするのに言語は必須ではない。OICは、進化的に言語に先立って起こったと考えられる。発信者・受信者に共有された慣習的記号はOICを強化することを機能として現れ、それが高度に体系化したのが現在の言語である。OICの一種である言語コミュニケーションでは、発話が意図の主な証拠になる。この証拠として働くことを機能として言語は今の形になった。このような進化の結果、我々は、読心能力と2つの関連性原理（スペルベル・ウィルソン 1995/1999）によって、言語コミュニケーションをしている。

<sup>2</sup> 「あるものの固有機能というのは、そのものがある働きをすることによってそれが属する全体のシステムの存続に貢献し、それゆえそれ自身も選択されて存続することになったような働きのことである。」「たとえば、心臓は体内に血液を循環させることによって生物の生存に貢献し、それゆえ自然選択によって選択され存続してきた。このとき、心臓は血液を循環させるという固有機能をもつと言われる。」（ミリカン 2004/2007: 343 訳者解説）

RFT は以上を踏まえ、言語は OIC のために設計され、最適化されていると考える<sup>3</sup>。RFT ではさらに、名詞句の意味も同様と考える。具体的にどう最適化されているかには様々な可能性があるものの、OIC において話し手は聞き手の心的状態を常に推測していることから、話し手が発した名詞句の意味とは話し手が推測した聞き手の心における RF (またはその一部) であり、名詞句の話し手の意味はそれに尽きると RFT は主張する。

名詞句の聞き手の意味はどうなるのかと言うと、聞き手は聞き手で、自分の心が読まれていることを踏まえつつ、そこにある RF を操作している。その RF とその操作が聞き手の意味ということになる。言語がコミュニケーションの役に立つ上で、これ以外の客観的な意味は必要ない。また、話し手の意味と聞き手の意味が食い違ってない保証はなく、それを保証する手段もない。もちろん、話し手・聞き手による間主観的な調整は絶え間なく行われており、そして、どちらも人間である以上、両者の心の働きは概ね同じであろうから、言語実践上は、客観的な意味が 1 つあるという信念の元でコミュニケーションが行われていることが多い。

話し手の意味は、聞き手の意味に先立つものである。聞き手が聞いていない、読み手がいないなどの理由で、話し手・書き手の意味だけがある言語表現はよくあると考えられるのに対して、聞き手の意味だけがある言語表現は、空耳のような特殊な場合以外にはないからである。RFT において名詞句の意味とは、第一義的には、話し手が推定する聞き手の心における RF である。

以上の言語観に立つ RFT が、心理主義の探求対象である心のモデルとしてどのようなものを想定し、そこにどのように位置付けられるのかを次に述べる。RFT は、その源流となるジャッケンドフ (2002/2006) の言語の並列機構や関連性理論と同様、古典的計算主義の立場を取り、心を形式システム——「離散的なアイテムをその形式的な性質に言及した規則に従って操作することで計算を進めるシステム」(戸田山 2004: 30) ——としてモデル化する。我々の体は、五感で得た外界からの刺激を心の各部門で操作してはインタフェースを介して別の部門に送るというやり方で処理をする。並列機構はこのような見方で人間の言語能力をモデル化したものであり、音韻部門、統語部門などが分節音や統語範疇といったそれぞれの要素をそれぞれの規則で組み合わせて、文の音韻構造や統語構造といった複合的な構造体を作る。各部門で心的操作・計算の対象となる記号は、統語部門以外のもも、統語論的構造を持つ。つまり、複合的な記号は原子的な記号を規則に従って組み合わせることによってでき、複合的な記号の内容は構成要素とその組合わさり方によって決まる。このような「統語論的性質によって駆動するエンジン」(pp. 31-32) として心を捉える見方は、意味を担う概念構造にも適用される。概念構造においては、記号が表象である点が他の計算システムとは異なる (p. 28)。概念構造においても、記号の意義・価値は、システムにおける他の記号との可能な区別によって保証され、その区別は究極的には脳状態の何らかの区別と相同であると考えられる。

---

<sup>3</sup> もっとも、スコット＝フィリップスの進化のシナリオは、言語の究極要因の説明であるから、現代の言語のメカニズムについての至近要因の説明とは独立している。したがって、このシナリオが成り立たなくとも、現代の言語に関する RFT の主張が反証されるわけではない。

概念構造においてどのような区別を立てる必要があるのかを考えるにあたっては、心の計算論的理論の根底を成す不変性の主張 (the Tenet of Constancy, Jackendoff 1992) が導き手になる。心理的な不変性があるときはその不変性をコード化する心的表象が必要だとするものである (p. 5)。したがって、我々が認めることのできる種類の区別は、空間構造なども含む広義の概念構造<sup>4</sup>の理論においても区別できる必要がある (p. 8)。2.3 節で述べる指示参照ファイルのデータ構造はこのような考慮の元で考案された。

## 2.2. 言語のモデルにおける指示参照ファイル理論の位置付け

RFT は言語の並列機構の概念構造の理論である。並列した音韻部門・統語部門・概念部門のそれぞれは、要素を組み合わせる複合的な構造 (音節、文、複合的概念構造など) を生成する。各部門はインタフェースで接し、各インタフェースの規則に従って構造体は対応付けられる。各部門の構造は層 (tier) に分かれる。音韻構造は、韻律、音節、分節音などの層を成し、概念構造は記述層 (= 語彙概念構造)、情報構造層、指示層に分かれる。RFT は、研究の進んでいない概念構造の中でも最も研究されていない指示層を精緻化する。

誤解を避けるために言っておくと、RFT は文法理論ではない。文法理論は、基本的に言語形式と意味の対応関係を記述したもので、どちらかを入力すればもう一方を出力する装置と捉えられる。しかし、RFT は、言語形式  $\longleftrightarrow$  RF の写像を目指したものではない。RFT は、言語使用を可能にする概念的資源の記述を第一に目指している。RFT を文法コードの理論と誤解されるよりは、メンタル・スペース理論 (フォコニエ 1984/1996) のように、解釈の結果を記述するものだとまずは理解されたい。RFT が文法理論とは異なることは、並列機構における言語そのもの (language per se) —— 音韻部門、統語部門とそれらに関わるインタフェース——に概念部門が含まれていない (Culicover and Jackendoff 2005: 20) という点からも明らかである。概念構造は言語そのものに進化的に先立ち、言語はそれを伝達可能な形式にコード化することを機能として系統発生・個体発生するのである (同)。

次の点にも RFT が文法理論ではないことが現れている。RFT が RF として捉える名詞句の意味とは語用論的意味であって、その名詞句を構成する要素がコード化する意味を合成したもの (多くの理論で意味論的意味とされる) とは質的に異なる。そもそも、RF は概念構造における認知実体 (cognitive entity) であるのに対して、名詞句を構成する語彙項目のコード化する意味は概念構造にあるものではない。並列機構において、語彙項目は音韻・統語・概念の局所的インタフェース規則と

<sup>4</sup> ここでの広義の概念構造とは、大雑把に言って、世界を表象する構造で、狭義の概念構造 (「離散的な素性と関数からできた階層的な構造をなし、どの範疇に属するか (分類) とか述語一項構造に関する理解の側面とかをコード化する」、ジャッケンドフ 2002/2006: 410) に加えて、空間構造 (「形や空間的配置に関して、[視覚的入力だけでなく、] 触覚システム (触れた感じ)、聴覚による位置同定、および体性感覚 (自分の体の位置に関する感覚) からの入力を受け取り統合する」、p. 411) や嗅覚、味覚などの入力から得られる構造を含む。狭義概念構造が言語そのものとインタフェースでつながっていて、空間構造は、一方で概念構造と、他方で視覚的知覚・触覚的知覚・自己受容感覚的知覚・行動制御と結びついていると考えられている (p. 413)。

して捉えられ、名詞句の表現にコード化された意味とは構成要素の課す概念構造へのインタフェース制約を合成したものであるということになる。これ自体は概念構造ではなく、いわばその鋳型である。

例えば、ジャッケンドフ (2002/2006: 5) に従うと、名詞句 *the star* の概念構造への制約は下のようになる。

[Object [TYPE:STAR]<sub>i</sub>, DEF<sub>j</sub>]<sub>k</sub>

添字  $i, j, k$  はそれぞれ、*star*、*the*、名詞句全体との対応を表す。RFT の言葉で言うと、 $k$  は RF に対応することを表す (大文字は RF への対応を表すとす)。[TYPE:STAR] は K IS STAR という内容特徴が RF にあるという制約 (ただし、*star* の詳しい意味については未指定)、DEF は対応する RF が聞き手の心において同定可能であるという制約を表す。Object は RF の存在論的範疇 (2.3.4) を表す。

意味論的意味 (言語表現がコード化していて、文脈無しに得られる意味) と語用論的意味 (コミュニケーションにおいて伝わる意味) はこのようにして理論的に峻別される。合成的意味論——複合的言語表現の各部分にコード化された意味と部分の組み合わせ方から言語表現全体の意味を合成する——は基本的に鋳型の研究であるから、鋳型によって制約される概念構造自体の研究である RFT とは別種のものである。そのような研究は、意味論的意味の研究に先立って、あるいは遅くともそれと並行して進められるべきである。

### 2.3. 指示参照ファイルのデータ構造

RF には 4 種類のデータが含まれる。それらは全て「システムがしなくてはならない区別」(ジャッケンドフ 2002/2006: 365) という意味での非言語的な素性である。なお、RF は長期記憶ではなくワーキングメモリに構築される構造であるため、RF に対応する対象に関して持っている知識が全て含まれるわけではない (例えば、一人称代名詞が使われたとき、話し手自身に対応する RF に、自分についての膨大な知識が全て含まれると考えるのは不合理である)。また、RF の中身として表記される各部分の活性化の度合いは当然様々であるが、本稿ではその差は捨象している。RF のデータ構造の概観のために、次例の主語名詞句に対応する RF を示し、以下解説していく。(2) の下線は発話によって加わる情報を表す。

- (1) 犯人は身長 2 m の学生だ。
- (2) 「犯人」 / @ (位置付け) 聞き手 / ONT (存在論的範疇) 人 [+token] / ID  $x$  / CNT (内容特徴)  $\langle x$  が洋梨を盗んだ犯人だ  $\rangle$  ;  $\langle x$  が学生だ  $\rangle$  ; [身長 : 2m]

### 2.3.1. RF に対応する言語表現 「 」

概念構造の認知実体である RF は、言語使用以外でも用いられるため、対応する言語表現を持たないことがあるものの、名詞句の分析に RF を用いる本稿では、RF に対応する言語表現があり、それを「 」に入れて表記する。厳密には言語表現は、RF とインタフェースで結ばれる統語構造の NP とそれに対応する音韻構造を合わせたもので、RF の一部ではない。他の表現でも同じ ID の RF に言及可能である。言語表現は話し手がどのような RF を意図しているかを聞き手が推測する手がかりとなるものの、聞き手は以下で述べられる RF の中身について、語用論的推論をする必要が常にある。上の例では、どの事件の犯人かは表現されておらず、聞き手は推論によって、洋梨を盗んだということ補っている。

### 2.3.2. 内容特徴 (CNT) : 記述、特質-値、関係性-リンク先

内容特徴は、RF に対応する対象についての個別的な知識で、ワーキングメモリにおいて活性化しているものが含まれる。概念的な内容特徴は、(i) 記述、(ii) 特質-値 (attribute-value)、(iii) 関係性-リンク先に分けられる。本稿ではいずれも便宜上自然言語で表記する。

記述は〈x が学生だ〉や〈x が洋梨 b を盗んだ〉のような命題の形をしたものである (x と b は後述する RF の ID で、それによって RF を代表している)。自然言語の文法が許せば、RF の ID の部分を RD の存在論的範疇に対応する名詞にし、それを主要部として関係節化することで、RF に対応しうる表現を作ることができる。例えば、〈x が洋梨 b を盗んだ〉という内容特徴が入っている RF (存在論的範疇 人) は、「洋梨を盗んだ人」に対応させることができる。

[特質 : 値] は x [身長 : 2m] のようなものである。RF が [特質 : 値] を含むことを示す際には、RF の ID (上の例では x) を [ ] の前に付けて表記する。以下本稿で問題にする (体重) 60 kg のような [特質 : 値] の値は、他の独立した RF に対応しない<sup>5</sup>。《父 : 太郎》のような、値が他の RF に対応するものは《関係性 : リンク先》と呼び、[特質 : 値] と区別する。例えば、花子の父が太郎の場合、「花子の父」という表現によって太郎 RF にアクセスすることは、花子 RF の《父 : 太郎》を経由して行われる。特質によってその値は様々で、[合否 : {合格・不合格}] のように二値的なもの、内容 (例 太郎の家の火事 [原因 : 太郎が放火したこと]) などがある。

独立した RF に対応するか否かを判別する一応の目安として、次が挙げられる : A の B に関心があることが、A に関心があることを含意する (ように直観的に思われる) 場合には、B は独立した RF に対応しない。例えば、太郎の身長に関心があることは、他の点では太郎に関心がなくとも太郎に関心があることを含意する (ように直観的に思われる) ため、「身長」は独立 RF に対応せず、太郎 RF の特質に対応すると考えられる。一方、太郎の父に関心があることは、太郎の父が同定できて

<sup>5</sup> 特質とその値という概念はアドホックなものではなく、山泉 (2020a) で「合否」「善悪」「男女」などの「並列名詞」とそれが主要部の名詞句の意味を捉えるためにも用いられている。特質-値は、上山 (2015: 1.2.4) の degree property に概ね相当する。ただし、上山が category property に含めている名前も本稿では同列に扱う。

いてもいなくても、太郎に関心があることを含意しない（ように直観的に思われる）ため、「父」は太郎 RF から独立した RF に対応すると考えられる。

値がどのような種類のもので、RF 全体にアクセスできていることが、その部分である特質にアクセスすることの前提となる。例えば、(2) の特質 [身長] にアクセスするには、犯人 RF にアクセスできている必要がある。また、値へアクセスするにはその特質にアクセスできている必要がある。例えば、「2 m」と値だけを言われても、それが身長の値であることと、それが犯人の身長であることがわからなければ処理ができない。もちろん、値の表現から特質とそれを含む RF が推測できれば問題ない（例「36.5 度」→太郎 [体温：36.5 度]）。一方、値がわからないまま特質に言及することは可能である。これまでの例では値が定まっていたが、「太郎の血液型がわからない」のように、値が定まっていないこと（太郎 [血液型：x]）や、「太郎の名字が山田から佐藤に変わった」のように特質（[名字]）の値が変化することもある。値が定まっている場合も特質の名称でその値を表せる。例えば、話し手・聞き手が犯人の身長を知っているなら、「犯人の身長」で（犯人の身長としての）2 m を表せる。

本筋から外れるが、特質・値、関係性・リンク先などの区別の言語への反映として、これらの名称でそれを含む RF に言及できるかを少し考えよう。特質の名称でそれを含む RF に言及することは難しい。例えば、太郎が身長に特徴があっても「身長」などと呼ぶことはできない。一方、メトニミーによって、特質の値でそれを含む RF に言及することは可能である。例えば太郎（[体重：百貫]）のあだ名として「百貫」を使うことは可能だろう<sup>6</sup>。関係性-リンク先でも、それを含む RF 全体にアクセスできていることが、その部分である関係性にアクセスすることの前提となるが、リンク先の RF に別の経路でアクセスすることは可能である。例えば、太郎が誰の子かわからない場合に、「子」と呼ぶことはできないが、「太郎」で言及することはできる。関係性の名前ではそれを含む RF に言及することができない。例えば、花子《子：太郎》でも、花子を「子」と呼ぶことはできない。この点は特質-値と同様である。

### 2.3.3. ID

ある対象の RF の内容特徴がどれだけ変わっても、同一のものと考えて人間にはできる<sup>7</sup>。このことを捉えるため、RF のデータ構造として、内容特徴とは別立てで、ID を措定する。ID は、RF に対応する対象の同一性を記録する。ワーキングメモリから RF が消えても、次に現れたときに ID が同一であるという質的特徴によって、前と同じとみなされる対象の RF であることが保証され

---

<sup>6</sup> RFT は内在主義的立場を取って、「世界」を心の中に押し込める」（ジャッケンドフ 2002/2006: 10.4）ことをしているため、RF に言及することがすなわち RF に対応する表現の指示対象を指示することである。つまり、太郎を指示することは、概念世界における太郎である太郎 RF に対応する言語表現を用いることに他ならない。

<sup>7</sup> 例えば、心理学でトンネル効果という現象が知られている（Burke 1952）。トンネルの中にモノが突入していったら、もう一方からモノが出てきたのを見た場合、色・形・大きさが変わっていても、1つのモノの連続した移動を見ているように感じられることがある。



る。IDを持つのはRF全体に対応するものだけで、特質とその値である〔温度：26度〕のようなものは、どちらもIDを持たない。

ジャッケンドフ（2002/2006）の枠組みでIDにあたる指標素性は1種類しかないが、RFTでは以下の種類のIDを区別する。1. 同定されている対象に対応するRFは定項のID（ $a, b, \dots$ ）を持つ。2. 人間は同定されていない対象をも概念化して、他の対象と区別し、追跡することができる。例えば、ジグソーパズルを解いていて、欠けたピース2つを探す際、それぞれのピースに対応するRFがあり、内容特徴として、周囲のピースから想像される模様・形が入っていると考えられる。なお、これは空間構造（ジャッケンドフ2012/2019）でコード化される非概念的な内容特徴である。同定されていない対象のRFのIDは自由変項（ $x, y, \dots$ ）である。未解決事件の犯人を突き止めようとする場合も、犯人に対応するRFのIDが自由変項になっている（例（2））。3. 存在しないことがわかった対象に対応するRFのIDはnull値（ $\varphi, \psi, \dots$ ）になる。これはいわばファイルの「廃棄済」マークであり、IDがnull値のRFは記憶に残っても以後基本的に照応されなくなる<sup>8</sup>。4. 束縛変項（ $\alpha, \beta, \dots$ ）：叙述名詞句に対応するRFには、述語付けされる名詞句に対応するRFのIDに束縛されるIDがある。例えば、「太郎は学生だ」の「学生」に対応するRFのID $\alpha$ は「太郎」RFのID $a$ に束縛される（ $\alpha_a$ と表記する）。このようになるのは両者のRFの存在論的範疇が同じ場合で、「コレラは病気だ」も同様である。一方、「太郎は病気だ」の場合は、存在論的範疇が異なるため、こうはならず、「病気」の概念構造にある、病気になる主体のIDが太郎RFのIDに束縛されることになる。

以上のIDの種類の違いは、どの存在論的範疇（次節参照）の対象に対応するRFにもあるものだが、存在論的範疇によって「同定と個体化に関する特徴づけの条件」（ジャッケンドフ2002/2006: 373）が異なるため、IDの内実は存在論的範疇ごとに規定されなければならない。例えば、出来事などの状況に対応するRFの持つIDについては、状況の内容を考慮する必要がある。モノについては、前述のように、いくら内容特徴が変わっても、同一性を保った対象として概念化することが可能であり、従って同一性は抽象的なIDの同一性として捉えることが妥当である。一方、状況については、事情が異なる。例えば、「松阪の一夜」という名前で知られる出来事は、1763年5月25日、伊勢松阪の新上屋にて、賀茂真淵と本居宣長が国学研究について生涯に一度だけ語り合ったというようなことから成る内容（の少なくとも一部）で同定され、この出来事に対応するRFのIDは下線部で記述されるような内容のうち、心の持ち主が知っていることである。

ただし、出来事RFの同一性について、心が柔軟であることに注意しなければならない。国学史家の研究によって、賀茂真淵と本居宣長が語り合ったのが5月25日ではなく5月24日だったと判明

<sup>8</sup> ここでの「存在しない」とは、外部世界に物理的に存在しないということではない。内在主義的立場を取るRFTにとって存在・非存在が問題になるのは、概念世界においてである。概念化されたものは、1つの意味においてその人の概念世界において存在するということになる。しかし、概念化後の情報から、RFに対応するものがないとわかることがあり、その場合にnull値のIDが用いられる。つまり、null値のIDは、いわば概念世界とそれが表す世界とのズレを調整するための装置である。なお、概念世界には、心の持ち主が現実と考える世界に対応するもの以外に様々あり、後述の@（位置付け）で区別される。ある位置付けにおいてIDがnull値になっても、他の位置付けにおいてもそうなるとは限らない。

したとしよう。そうすると、厳密には下線部の内容は同一ではなくなるけれども、同一の出来事の知識を少し変更するにとどめ、全く別の出来事を知ったとか、松阪の一夜はなかったとは思わないから、別の RF になるわけではなかろう。同一性を保ったまま内容の変更がある場合、その内容を ID ではなく内容特徴に入れることは不適切である。例えば、この出来事 (ID a) を太郎が知っていて、次郎が知らないことを想起している人の心には、〈太郎が a を知っている〉〈次郎が a を知らない〉が RF に入る。これらこそが出来事の同一性には全く関わりがなく、内容特徴として相応しいからである。出来事の内容自体については、ID の方に入れることにするものの、内容自体についても変更があり得ることを考慮し、内容が ID に入るものについても、a や x のような ID を設けることにする。ID に入る内容が先立ち、その内容によって定項になるか自由変項になるかが決まると考える。出来事 RF の同一性を保ったまま、どこまでの内容の変更が許されるのかは経験的な問題である。

また、ID だけでなく特質の値も内容が占めることがある。例えば、筆者が今使っている PC の機種、同サイズのパソコンの中で世界最軽量だという特徴は、知っている人にとって、この機種の RF ([token]、次節参照) の特質 [特徴] の内容値となり得る。内容特徴であるから、世界最軽量でなくなっても機種の同一性に影響はない。

#### 2.3.4. 存在論的範疇 ONT

素性 ONT は、RF が対応する対象が属する存在論的範疇を表す。どのカテゴリーに属するかによって、上で論じたようにどのように同定・個体化するかが異なり、どのような内容特徴が可能かも異なる。ONT の素性の値として認められるのは、形而上学において問題となるような最も一般的な範疇だけであるが、複合的な値も可能で、その場合は生成語彙論 (Pustejovsky 1995) でドット事物と言われるものになる。例えば、ONT 人は“体・心”のドット事物として概念化されていると考えられる<sup>9</sup> (ジャッケンドフ 2002/2006: 11 章 10 節)。そうすることで魂の不死、輪廻転生、『君の名は。』のような 2 人の体・心の入れ替わりなどの概念化が扱えるようになる。

我々は物体、場所、動作、数など様々な範疇の対象を名詞句「あれ」や「これ」で指示できる。このことは、言語で表される概念世界においてそれらの存在を認めていることを示す (ジャッケンドフ 2002/2006: 10 章、2012/2019: 29 章)。概念化できるものは全て RF になり得る。どのような存在論的範疇があり、どう同定・個体化しているかは、世界にどのようなものが存在すると人間が理解しているかを経験的に解明する認知形而上学 (2012/2019: 第 3 部, 山泉 2020c) の経験的な問題で、認知形而上学は同じ視座の意味論である RFT と共に進める必要がある。

言語の観察からもう 1 つ言えることは、人間言語の基盤にある概念世界にはタイプという存在者が認められていることである。「絶滅する」のように、意味的項として個体ではなくタイプを取る述

<sup>9</sup> ただし、RFT では、語彙的意味の記述をする生成語彙論とは違って、名詞句の意味としてワーキングメモリにおける RF を問題にしているため、発話中の名詞句の理解において片方の範疇しか必要でないものはドット事物として扱わない。

語があることがその1つの根拠である（もう1つの根拠は同書 p. 210 参照）。したがって、RF にもタイプとトークンの区別が必要で、トークン素性 [±token] でそれを表すことにする。CPNP との関連で重要なのは、タイプ・トークンの区別がなさそうな存在論的範疇もあるということである。距離はその例である。

- (3) The fish that got away was *this/yay* long [demonstrating]. (逃げた魚は [動作で示して] こんなにでかかった。) (ジャッケンドフ 2002/2006: 372)

魚の長さとお手の間の空間の距離について、「私の手の間の空間と魚の大きさが、19 インチとかであらわされた一般的なタイプの異なる実例であると考えるのは奇妙だと思う」(p. 378) と述べられていて、筆者も同感である。モノについては、タイプレベルの同一性（今日、太郎と次郎は同じ帽子を被っている）とトークンレベルの同一性（太郎はいつも同じ帽子を被っている）がある<sup>10</sup>一方で、距離については、「同じ距離」に同様の違いが考えられないこともタイプ／トークンの区別がないことの根拠となる。ジャッケンドフは、このような範疇は指標素性を持たない可能性があるとしている (p. 378)。

RFT ではこの洞察を次のように活かす。指標素性は RFT の ID におおよそ対応するため、距離のような存在論的範疇は通常、RF 全体（常に ID が与えられる）に対応せず、RF 中の [特質：値]（例：[距離：3m]）に対応する<sup>11</sup>。温度、重さなども同様である。[±token] の区別の有無と、独立した RF に対応するかしないかは、このように相関している。

### 2.3.5. @ 位置付け

人間は、(i) 自分にとっての (ii) 現実世界の (iii) 実態以外も想像・理解できる。(i) 自分のもとは異なる他人の心を推測できる。自分の心が他人にどのように推測されているのかを推測することもでき（再帰的読心）、この能力の高度なものが OIC を可能にする（スコット＝フィリップス 2015/2021）。(ii) 物語の世界など現実世界以外の世界も概念化できる。(iii) 任意の世界について、実態とみなしているものとは異なる様相を想像することもできる。例えば、永久機関が現実世界に存在することを願望し、それがあつた世界の事態を思い描くことができる。(i)(ii)(iii) を組み合わせることも可能で、他人が理解する物語世界において登場人物に望まれていることなども概念化できる。つまり、自分にとっての現実世界の実態以外に位置付けられる対象に対応する RF を人間は抱くことができる。たとえその対象と対応するものが自分にとっての現実世界の実態にもあつても、内容

<sup>10</sup> 勿論、太郎と次郎が頭をくっつけて巨大な帽子を同時に被っている場合はトークンレベルで同一で、太郎が同種の帽子をいくつも持っていてそれを取っ替え引っ替え被っている場合はタイプレベルで同一ということになる。

<sup>11</sup> ただし、人間の認知には驚くべき柔軟性があり、あるところから別のところまでの距離を [+token] の RF 化することも可能である。吉田戦車の『伝染るんです。』（第4巻）の距離マニア達は、そのような概念化をしていると分析できる。

特徴などが異なることがあるため、RF には位置付けを記録しておく必要がある。例えば、話し手が想定する聞き手の「竹取物語」の物語世界におけるかぐや姫の願望という位置付けは、@話し手>聞き手>「竹取物語」の世界>かぐや姫>願望のように表記する。

言語コミュニケーションにおいてこのような位置付けは通常表現されず、聞き手は発話の名詞句に対応する RF の位置付けを推測する必要がある。2.1 で述べた通り、RFT では、発話における名詞句の話し手の意味とは、話し手が推定した聞き手の心における RF だと考える。したがって、名詞句の RF は話し手が想定した聞き手の心に位置付けられるのがデフォルトであり、簡便のため「話し手が想定した」を省略した「@聞き手」が名詞句に対応する RF のデフォルトの値になる。さらに、話し手が想定する聞き手の心において (i) 聞き手以外の心 (ii) 現実以外の世界 (iii) 実態以外の様相に位置付けられることがあり得る。例えば、「シャーロック・ホームズは存在しない」という言明は、主語名詞句を「@聞き手>シャーロック・ホームズの物語世界」に位置付けるなら偽、「@聞き手>現実世界」に位置付けるなら真である<sup>12</sup>。

RF ごとの@に加えて、内容特徴ごとの@も必要になる。このことを示すため、(4) (発話や例文ではなく、単に事態を表すと解釈されたい) を検討しよう。

- (4) a. リアルな犬をリアルに飼う。  
b. イマジナリーな犬をリアルに飼う。  
c. イマジナリーな犬をイマジナリーに飼う。  
d. リアルな犬をイマジナリーに飼う。

([https://twitter.com/chan\\_watashi/status/1177412202430484481](https://twitter.com/chan_watashi/status/1177412202430484481) より抜粋)

この4つの事態を人間は区別できるため、2.1 で述べた不変性の主張に従えば、それを捉えるために内容特徴ごとの@が必要になる<sup>13</sup>。犬 (ID a) の飼い主が太郎 (ID b) だとすると、この4つは (5) のように書き分けられる。

- (5) a. 「犬」/ID a/@現実/CNT 〈b が a を飼う〉  
b. 「犬」/ID a/@太郎の想像/CNT 〈b が a を飼う〉  
c. 「犬」/ID a/@太郎の想像/CNT 〈b が a を飼う〉 @太郎の想像  
d. 「犬」/ID a/@現実/CNT 〈b が a を飼う〉 @太郎の想像

<sup>12</sup> 心の中の現実世界や物語世界の認知的対応物が言語と独立しており、それらと、言語を参考に組み立てた概念構造を照らし合わせて、矛盾や食い違いがあれば偽、なければ真と判断される。詳細は、ジャッケンドフ (2012/2019: 34 章「文を真だと判断するとはどういうことか」) を参照。

<sup>13</sup> イマジナリーフレンドのようなものとして、イマジナリーな飼い犬がいるのが b である。一方、実際には飼っていない実在の犬に付いて歩いて飼い主感覚を味わう場合は d で、b と d を合わせたのが c である。c は、2 つの「@太郎の想像」の間に、スコープの大小関係を想定する必要があると考えられるが、ここでは立ち入らない。

内容特徴ごとの@はRFの@と値が異なる場合にだけ表記することにする。

## 2.4. インタフェース規則

以上のようなデータ構造を持つRFは名詞句とどのように対応するのか。RFTは統語構造-概念構造間のインタフェース規則として次の2つを主張する。他にも統語構造-概念構造間にインタフェース規則はあり、語彙項目の多くは特定のなものを含む。

- (6) 規則 1. 統語構造の名詞句 1 つは、概念構造の RF 1 つ（あるいはその部分構造である特質や値など）に対応する（イディオム *kick the bucket* の *the bucket* などは例外）。
- (7) 規則 2. 名詞句 a を主要部とする名詞句 b 中にある名詞句 c に対応する RF（またはその部分構造）は名詞句 a・名詞句 b に対応する同一の RF（またはその部分構造）の中に現れる。（例えば名詞句 *the cat* (ID a) が主要部の名詞句 *the cat in the box* 中にある名詞句 *the box* (ID c) に対応する RF は、名詞句 *the cat* と名詞句 *the cat in the box* に対応する RF の内容特徴 〈a is in c〉に現れる。）

本稿は N-意味理論と RFT による CPNP の分析の優劣を論じる。一般に、異なる枠組みの間に通約不可能性があるとき、どちらの分析がより妥当かを判定することは極めて難しい。RFT と N-意味理論は前提となる視座が大きく異なる。N-意味理論が受け入れていない前提に立った批判はフェアではない。「競争するパラダイムの主張者たちは、[...] 相手側が必要とするような非経験的仮定のすべてを、他の側では認めようとはしないだろう」（クーン 1970/1971: 167）という事情はここでも当てはまる。N-意味理論の前提には不明な部分が多いとは言え、言語は OIC のためにデザインされているという RFT の言語観が受け入れられていないことは明らかである（西山 2019b）。畢竟、「パラダイム間の競争は、証明によって結着をつけられるような種類の戦いではない」（クーン 1970/1971: 167）。しかし、古いパラダイムを危機に陥れた問題を新しいパラダイムが解けるという主張は強力なものとなる（p. 173）。CPNP を分析する次節以降では、まず N-意味理論の分析を N-意味理論の枠内で提示し、それを N-意味理論の枠からなるべく出ずに批判的に検討して、どのような問題があるのかを述べる。次に CPNP を RFT の立場でも分析して、N-意味理論の分析にあるような問題がないことを示す。つまり、「通常科学→危機→科学革命→新パラダイムの形成」という科学革命の流れに沿った論述（同書）を行う。

### 3. N-意味理論の潜伏命題文の分析の批判的検討

#### 3.1 変項名詞句としての潜伏命題名詞句

(8) には曖昧性がある (西山 2013: 390)。1つの解釈は (9) のように下線部名詞句が [ ] 内の間接疑問節でパラフレーズされる潜伏疑問 (西山 2013) の解釈である。この場合、「わたくし」は花子の年齢を知らない。もう1つの解釈は、(10) のようにパラフレーズできる。

(8) わたくしは、花子の年齢が気になる。(西山 2013: 390、下線も原文)

(9) 《わたくしは、[花子の年齢がいくつであるか] が気になる》

(10) 《わたくしは、[花子の年齢は、現にそうであるしかじかの年齢である] ということが気になる》

つまり、「わたくし」は花子の年齢を知っていて、花子はその歳であることが不都合だと思っているということである。この解釈は、[ ] が間接疑問節でないことから、潜伏疑問の解釈とは言えない。[ ] が変項を含まない命題を表すこのような構文を西山は潜伏命題文と呼び、そこに含まれる「花子の年齢」のような名詞句を潜伏命題名詞句 (以下、CPNP) と呼んでいる。この種の文の例として他に以下の例が挙げられている (p. 389、下線は原文)。ただし、f は「なぜその会社を志望したか」「何がその会社を志望した理由か」のように間接疑問節で下線部をパラフレーズできるため、例として適切ではないだろう。以下の議論でも除外する。

- (11) a. その箱は、入れた荷物の重さのために底が抜けた。  
b. 花子は、年齢のせいで、就職がなかなかできないようだ。  
c. 東京-熱海間の距離が太郎を疲れさせた。  
d. 社長はそのプールの深さが気に入った。  
e. 太郎はその会社の初任給に驚いた。  
f. 太郎はその会社を志望した理由を書いた。  
g. 太郎はその部屋の天井の高さに驚いた。

N-意味理論は、CPNP も潜伏疑問名詞句と同様、指示的名詞句ではないと主張する。指示的名詞句とは、世界の中の対象を指示するために用いられている名詞句 (西山 2007: 5) とされ、(8) の「わたくし」、(11) a の「その箱」、(11) d の「社長」はその例である。一方、(12) の「そのドアの幅」は、「(仮にそれが 85 cm だとしても) 85 cm を指示するわけではない」(西山 2013: 387) とされる<sup>14</sup>。

(12) そのドアの幅が、子供たちの部屋からの脱出を妨げた。

---

<sup>14</sup> このことを示すためにも用いられた N-意味理論でよく見られる論法があり、それには問題があることを山泉 (2021: 4.2 節の中の「名詞句の置換不可能性によって非指示性を示す議論について」) で論じた。

N-意味理論は、潜伏疑問名詞句だけでなく、CPNP も変項名詞句の一種と分析する。変項名詞句とは、「命題関数を表す名詞句であり、変項の値を充足することによって指定文の基本的意味構造を形成するもの」（西山 2007: 10）である。「潜伏命題文を構築する名詞句も、（倒置）指定文の意味構造を有する名詞句を基礎にして意味論的に値が充足された結果にほかならぬ」（西山 2013: 391）とされる。その例として、(12) [そのドアの幅が、子供たちの部屋からの脱出を妨げた。] の分析を引用する。

[(12)] は、しかるべきコンテキストでは、[(13)] のような表意を表しているといえる。

(13) 《[そのドアの幅は 85cm だ] ということが、子供たちの部屋からの脱出を妨げた》

したがって、[(12)] の「そのドアの幅」は、意味の深いレベルでは [(14)] のような命題関数を表している変項名詞句であり、その変項の値は、まさに当該のドアの幅を表示する数字、N によって充足されるのである。

(14) [そのドアの幅は x である]

(15) [そのドアの幅は N である] (但し、N は、当該のドアの幅を表す数字)

より平易な言い方をすれば、[(12)] の言語的意味は [(16)] のようなものとみなすべきである。

(16) 《[そのドアの幅は、現にそうであるしかじかの幅である] という事実が、子供たちの部屋からの脱出を妨げた》  
(西山 2013: 388、番号は引用者)

### 3.2. N-意味理論の分析への 7 つの疑問

(12) を例に、N-意味理論による CPNP の分析を紹介し、批判的に検討していく。この分析には多くの疑問がある。

#### 3.2.1. 値が充足されているのに“変項”名詞句？

第一に、変項が埋まっているのなら、「変項名詞句」とは言えないのではないか？ 変項の値の充足のされ方という観点から考えると、潜伏疑問文の変項名詞句の変項は、少なくとも述語によっては充足されない（例「犯人がわかった/わからない」）。倒置指定文（例「犯人は太郎だ」）では、主語名詞句の表す命題関数（[x が犯人だ]）の変項を述語名詞句の表す値（太郎）が充足するものの、主語名詞句単独の意味としては、値は充足されていないとされる。一方、潜伏命題文では、その値は文中の他の表現が表すものが埋めるまでもなく最初から定まっっていて、文の表す事態の結果変わるものでもない。そうでなければ潜伏命題文にはならない。したがって、N-意味理論は、CPNP を定項名詞句と呼ぶべきかもしれない。また、変項名詞句は、基本的に非指示的とされている（西山 2003: 2.2）。しかし、CPNP は命題を表すなら、命題を指示すると言えるのではないのかという疑問もある。以上は、基本的には単なる呼び方や用語の定義の問題ではあるが、N-意味理論の所論を批判的に吟味する必要があることが示唆される。

### 3.2.2. CPNP はどのレベルで命題関数を表すのか？

第二の疑問に移る。CPNP が命題関数を表す「意味の深いレベル」((13))とは、具体的にはどのようなレベルなのか？ (8) は、潜伏命題文の読みか潜伏疑問文の読みかによって意味論的に曖昧とされている(西山 2013: 390-391)。N-意味理論においては、論理形式という意味論レベルにおいてCPNP と潜伏疑問名詞句は、どちらも変項名詞句であるにも関わらず区別されているのだろうか。統語論における派生のようなものを想定し、論理形式よりさらに“深い”レベルを新たに設けるのだろうか。潜伏疑問文については、「当該名詞句が変項名詞句であり、主動詞が引き金になって、変項名詞句の変項の値を Wh 化している構文といえる」(西山 2013: 380) と述べられている<sup>15</sup>。例えば、次例の下線部は、[x が花子の出身地だ] という命題関数を表す変項名詞句である。

(17) 太郎は、花子の出身地を知りたい。

この x が潜伏疑問述語によって wh 化されることで、どこが花子の出身地かという指定疑問文意味構造が形成され、述語「知りたい」の対象となる(第 13 章 3)。同様に潜伏命題文についても、「当該名詞句が変項名詞句であり、主動詞が引き金になって、変項名詞句の変項の値を N 化している構文」とするのだろうか。

### 3.2.3. 倒置指定文構造があるとなぜ言えるのか？

第三に、そもそも変項を埋めるという意味構造があることは、いかにして正当化されるのか？ 西山(2013)は潜伏命題文(12)の「そのドアの幅」が表す命題関数についてこう述べている。

ここで注意すべきは、[(14) [そのドアの幅は x である]]、あるいは [(15) [そのドアの幅は N である]] の [ ] の部分は倒置指定文構造を有しているという点である。したがって、[(12)] の意味構造の背後には倒置指定文構造が隠れていることが分かる。 (p. 388)

「[(14)、あるいは [(15)]]」と変項を含んだものを忍び込ませているが、値が定まっている以上、(15)の方が正確だろう。しかし、(15)には変項がなく、代わりに定項がある。CPNP の意味表示が変項の無い単なる命題ではなく、命題関数の変項の値が埋まるという構造、特に倒置指定文という名詞述語文の意味構造があるということが正当化されているようには見えない。倒置指定文構造でなければ、定義上、変項名詞句とは言えない点も重要である。変項名詞句は、倒置指定文、絶対存在文、変化文など多くの構文の分析に用いられていて、N-意味理論の最重要概念(西山 2013: 331)とされる。

<sup>15</sup> そもそも潜伏疑問名詞句が変項名詞句になるのは、その名詞句が潜伏疑問述語の特定の項(例えば、「尋ねる」の目的語)であるからだろう。述語がまず変項名詞句という意味機能を付与し、その後で変項を wh 化するのだとしたら、全くの二度手間ではないだろうか。



N-意味理論は CPNP を広く知らしめたものの、本稿のここまでの分析が妥当ならば、これを分析する適切な道具がなく、変則事例とせざるを得ないことになる。

### 3.2.4. 指定 wh 疑問文以外の構造の命題関数は CPNP に関わらないのか？

第四の疑問は、より具体的なもので、次のような例は変項名詞句として分析するには無理があるのではないかということである。

- (18) 一週間後に明らかになる医師国家試験の合否が太郎の人生を狂わせることになるとは知る由もなかった。<sup>16</sup>

一般に、変項名詞句の表すものは、単に変項を含んだ命題であれば何でもよいわけではない。指定文構造の命題関数に限られ、これは変項名詞句の定義に含まれている（西山 2013 など）。潜伏疑問文の場合には、前述の通り、述語が変項名詞句の命題関数の変項を wh 化し、指定コピュラ文構造の wh 疑問が潜伏するとされる。しかし、そのような一般化は、「合否」「当落」「有無」「勝敗」のような名詞（山泉 2019 の「潜伏極性疑問名詞」）が主要部の名詞句に疑問が潜伏する場合には当てはまらない（山泉 2021a: 3.3）。

- (19) 太郎の医師国家試験の合否がわからない。

もし下線部に命題関数が潜伏しているとすれば、その変項は、命題の肯否、つまり極性の部分にあるだろう。

### 3.2.5. 名詞句の“意味機能”による多義性はなぜあるのか？

第五の疑問は、やや俯瞰した視座から N-意味理論を検討した場合に起こるもので、CPNP に限るものでもないが、ついでに述べておく。N-意味理論では、あるレベルでは同じ名詞句が指示的名詞句になったり、変項名詞句になったりする。例えば、「このドアの幅」は、次例 a では世界の中の対象を指示し、b では命題関数 [x がこのドアの幅だ] を表すとされる。

- (20) a. このドアの幅は、力士達には狭すぎる。  
b. このドアの幅は、60cm だ。

<sup>16</sup> 山泉 (2019: 3.3) では、「合否」のような潜伏極性疑問名詞は、潜伏命題文には使えないと述べられているが、誤りである。ただし、そこで例に挙がっている (i) は、(8) とは異なり、潜伏疑問文の読みが圧倒的に優勢で、潜伏命題文の読みは不可能であるように筆者には感じられる。

(i) 太郎の合否が気になる。(西山佑司、p.c.)

N-意味理論によると名詞句に広く見られるこの多義性<sup>17</sup>をどう理解すべきか？ なお、「そもそも、文中のある名詞句について、それを指示的名詞句でもなく、変項名詞句でもない、中立的なものを仮定することなどは不可能である」（西山 2013: 265）とされる。もちろん、N-意味理論の答えは、名詞句の意味機能によるというものであろう。しかし、なぜこの2つの意味なのかは問われてもよいだろう（他に、他の名詞句の指示対象に帰される属性を表す叙述名詞句もN-意味理論では認められているが、それは述語名詞句に限られるようである）。なお、RFTでは、名詞句に対応するRFの特質値・リンク先やIDが定項か自由変項かという違いによってこの2種の違いの多くの場合が捉えられ、この点以外は同じであることから共通性も捉えられる。

### 3.2.6. 潜伏しているものは命題か？ それとも事実か？

第六に、「潜伏命題文」に潜伏しているものはそもそも命題と呼べるものなのだろうか？ (21) が示すように、CPNPとして使われていた名詞句に真偽を述語付けられないことに注意しよう（参考：Ginzburg and Sag 2000: 68）。この場合には潜伏命題文にならないということである。(21)に「85 cm という～」 「3 m である～」のように値を明示しても容認できない。

- (21) ?? {そのドアの幅/そのプールの深さ} は {真だ/偽だ/正しい/間違っている}。  
(22) Cf. {そのドアの噂/そのプールの話} は {真だ/偽だ/正しい/間違っている}。

「ドアの幅」などの名詞句は、このような環境だけでなく、他の文脈でも命題を表せるとは言い難い。(23) と (24) を比べると、目的語名詞句と述語の組み合わせにより容認度に幅はあるものの、全体的に (23) より (24) の容認度が高いだろう。

- (23) ?太郎は {そのドアの幅/花子の年齢/その会社の初任給} を {信じている/疑っている/否定している/証明した}。(命題述語、目的語は命題を表す)  
(24) 太郎は {そのドアの幅/花子の年齢/その会社の初任給} を {知っている/明らかにした/忘れた}。(叙実 (factive) 述語、目的語は事実を表す)<sup>18</sup>

(23) の述語は、命題の真偽を問題にすることから目的語が命題を表すことが明白で、例えば「そのドアの幅」を [そのドアは 85 cm であること] のように潜伏命題名詞句として解釈すれば意味を成すはずである。しかし文の容認度が低いということは、語用論的に絶好のこの機会にさえ命題とし

<sup>17</sup> 筆者の知る限りでは、N-意味理論では、意味機能の違いによる名詞句の意味の違いは、意味論レベルの違いではあっても名詞句の多義性とは言われていない。

<sup>18</sup> 「伝えた」「報告した」「推測した」「予測した」「アナウンスした」などは叙実述語ではなく *resolutive predicates* (Ginzburg and Sag 2000: 3.2.1) と言われるもので、事実以外に命題や出来事も選択するものである (p. 72、註 23)。これらは事実以外を表す可能性があるため、ここでの議論から除外する。

て解釈できないことを示す。一方、(24) の述語は叙実述語で、同じ名詞句を問題なく項に取れる。しかし、これらの述語の目的語が表すのは、疑問 (question) や命題ではなく、それらと存在論的に異なる意味論的对象の事実 (fact) である (Ginzburg and Sag 2000: 3.2.3)<sup>19</sup>。N-意味理論ではこれらの概念を区別せず、潜伏命題文の「命題」はこれら全てを含むとも考えられるが、潜伏命題文と言われる現象においてこの区別が関与的であれば、区別して議論しなければならない。

(24) の述語は従来潜伏疑問述語とされていたもので、そのいくつかは、西山 (2013: 375) の潜伏疑問述語のリストにもある。その目的語は疑問を表すと想定されていたものの、厳密には事実を表すと考えられる。確かに、これらの名詞句は、「ドアの幅はどれ位か」のような疑問節に置き換えられる。しかし、その代わりに「ドアの幅は {85 cm/ある長さ} だ」という {こと/事実} のような事実を表す節にも置き換え可能で、しかも、「ある長さ」の場合は疑問節「ドアの幅はどれ位か」とほぼ同じ意味と言える。そして、これらの述語の事態において、幅や年齢などの値は太郎の心において定まっている（「忘れた」の場合は定まっていた）。また、「尋ねる」「自問する」「調査する」のような疑問埋め込み述語 (question embedding predicates, Ginzburg and Sag 2000: 3.2.1) の場合とは違って、誰かが何かについて疑問に思うということは必ずしも伴わない<sup>20</sup>。叙実述語の補文の疑問節・目的語名詞句は述語による強制 (coercion) によって疑問を解決する事実を表していると Ginzburg and Sag (2000: 3.2.3, 8.3.1) は分析している。したがって、(24) の目的語は事実を表すと考えるべきである。もっとも、これは潜伏命題文についての議論ではない。これを参考にした CPNP の分析を提示する。

潜伏命題文と言われるものにおいても、CPNP は事実を表すと筆者は主張する。実際に、西山 (2013) は、潜伏命題文 (12) のパラフレーズ (16) において「[そのドアの幅は、現にそうであるしかじかの幅である] という事実が」と述べているし、この「事実」を「命題」に変えると次のように奇妙な日本語になる：?? 《[そのドアの幅は、現にそうであるしかじかの幅である] という命題が、子供たちの部屋からの脱出を妨げた》。一方、事実は子どもたちの部屋からの脱出を妨げ得る。次例が示すように、事実は命題と対照的に因果的な力を持つという重要な違いがあるからである (鈴木他 2014: 4-5; Ginzberg and Sag 2000: 73、次例も同頁)。

(25) The {fact/#proposition} that Tony was ruthless made the fight against her difficult.

事実は、記述内容を持っているけれども、命題と対照的に断定の対象とならず、その代わりに、リマインドや感嘆の対象になる (Ginzberg and Sag 2000: 3.2.3)<sup>21</sup>。そして、命題と事実には、命題だ

<sup>19</sup> これらを区別することの正当化、及び分類体系も同書参照。

<sup>20</sup> (24)の目的語が疑問ではなく事実を表すとなると、潜伏疑問文に関する議論 (西山 2013, 山泉 2021a など) の多くも見直しを迫られるが、本稿の射程を超える。なお、Ginzburg and Sag (2000) の分析によると、平叙文は命題も事実も表示可能で、叙実述語の補文としては、強制無く事実を表す。

<sup>21</sup> ただし、事実は可能性 (possibilities) の一種であって、以下のように異議申し立てられることがあり、取り消し可能 (defeasible) である (Ginzburg and Sag 2000: 77)。

けが共有基盤を更新できるという違いもある<sup>22</sup>。例えば、感嘆文は一般に事実を表すが、そのために感嘆文で質問に答えるのは不適切である。

(26) A: How tall is he? B: #How tall he is!.

これまでの例でも、CPNP の値は現にそうであるしかじかの長さのように既に定まっていて、そこで新しい情報をもたらされることはない。以上の理由から、N-意味理論の“潜伏命題名詞句”には命題ではなく事実が潜伏していると考えべきであり、本来「潜伏事実名詞句」と呼ぶ方が適切だろう。もっとも、本稿ではそれを承知の上で一貫性を重視して、以下でも CPNP と呼ぶ<sup>23</sup>。

N-意味理論が CPNP を潜伏命題名詞句と呼ぶのは、命題関数を表す変項名詞句として分析するからだろう（もっとも、前述の通り、CPNP の“変項”は埋まっている）。CPNP が命題ではなく事実を表すなら、変項名詞句の表す変項を含んだ命題からは更に遠ざかる。今後、変項名詞句が何らかの過程を経て事実を表すようになるという風に N-意味理論が説を改訂することは可能かもしれないが、西山（2013）の分析では、事実を表すという点が捉えられていないのは間違いない。以上の議論は、感嘆文が表示するのは命題ではなく事実であるという議論（Castroviejo-Miró 2006: 5.1、Ginzberg and Sag 2000）を潜伏命題文に応用したものであり、潜伏感嘆文の N-意味理論の分析（熊本 2018）にも同じ批判が当てはまる。

### 3.2.7. どのような名詞句が CPNP になるのか？

以上は N-意味理論を前提としたもので、理論内の解決は N-意味理論の推進者に委ねたい。最後の疑問は RFT にも直接関係する：どのような性質を持つ名詞句が CPNP になるのか？ N-意味理論の命題関数の値が埋まっていれば何でも CPNP になるのではない（次例参照）。太郎が校長先生だとしよう。それでも次の文を、これ自体は問題のない文であるけれども、(28) のように解釈することは難しく、太郎が通せんぼしたという解釈になってしまう。

(27) 校長先生が子どもたちの部屋からの脱出を妨げた。

(28) 《[校長先生は太郎だ] ということが、子供たちの部屋からの脱出を妨げた》

---

(i) A: I regret the fact that Kim left. B: It's not a fact. She's hiding in my cupboard. (同)

なお、Castroviejo-Miró (2006: 163) では、事実の記述内容を当然のものとみなしているのは話し手とされているが、RFT の立場では、話し手が想定した聞き手と考えるべきだろう。ただし、潜伏命題名詞句の中でも、潜伏感嘆名詞句（熊本 2018）の場合は話し手とすべきかもしれない。

<sup>22</sup> Castroviejo-Miró (2006: 5 章) は、感嘆文についてこのことを述べているが、他の表現による事実にもこのことは当てはまるだろう。

<sup>23</sup> 以上の命題と事実の違いをまとめておく。命題は以下の性質を持つ：断定の対象になる。真偽を述語付けられる。共有基盤を更新できる。命題述語の目的語によって表される。因果的な力を持たない。一方、事実は以下の性質を持つ：断定の対象にならず、リマインドや感嘆の対象になる。真偽を述語付けられない。共有基盤を更新できない（新たな情報をもたらさない）。叙実述語の目的語によって表される。因果的な力を持つ。

したがって、この場合、(12) の西山の分析の如く次のように分析するわけにはいかない:「校長先生」は、意味の深いレベルでは [校長先生は x である] のような命題関数を表している変項名詞句であり、その変項の値は、まさに当該の校長先生を指示する名前、「太郎」によって充足されるのである……? (27) の「校長先生」は CPNP とは言い難いのである。この文の述語は (12) のものと同じであることに注意しよう。「幅」だけでなく「校長先生」や「太郎」も「妨げる」の項になれるし、しかも、その方がおそらく「妨げる」の普通の用法である。どのような名詞句が CPNP になるか、N-意味理論の分析から予測することはできない。また、CPNP を項にとれる述語には共通した意味的特徴があるのだろうか。これについても、N-意味理論の分析は特に何も教えてくれない。N-意味理論から離れ、RFT の枠組みで考察するときである。

## 4. RFT による潜伏命題名詞句の分析

### 4.1. RFT による潜伏命題名詞句の特徴づけ

CPNP は文中において事実を表すことを前節で述べた。これは RFT の分析においても維持される。事実であることは存在論的範疇で捉えられる。それに加えて RFT では、データ構造によって以下のように特徴付けることができる。CPNP は字義通りの意味、つまり概念構造へのインタフェース制約から合成的に得られる意味では特質または関係性に対応する名詞句で、用いられたコンテキストでは、問題の位置付け (@) において値が定まっている。例えば、(12) の「そのドアの幅」は「そのドア」RF の特質 [幅 : a] に対応する (関係性の例は 4.4 で詳述する)。

問題の位置付けは、デフォルトでは他の名詞句と同様に話し手が想定する聞き手の現実の実態であるが、CPNP が意味的項となっている述語が「惹かれた」「誇っている」のように主語名詞句の指示対象の心を描写する場合は、(話し手が想定する聞き手の心における) 想定されるその人の心である。例えば、(29) の「惹かれた」、(30) の「誇っている」ということが起こるのであれば、麦茶の容量は太郎の心、プールの深さは校長の心において、定まっていると考えられる。

(29) 太郎はそのお徳用麦茶の容量 600 ml に惹かれた。

(30) 校長はこのプールの深さ 3 m を誇っている。<sup>24</sup> (以上 2 例、萩澤大輝、p.c.)

位置付けの心の持ち主は、言語化される必要はなく、推論できればよい。また、値は、文中で明示されていなくても、また、具体的な値を知らずに目視などによって分かっているだけでも、問題の位置付けにおいて定まっていると言える。次例では、太郎 [年齢 : a] は、太郎の年齢を履歴書から

<sup>24</sup> (30) を否定 (～誇っていない) にすると、曖昧性が生じ、校長はプールの深さを知っているものの誇っていない状況だけでなく、校長がプールの深さを知らず、誇ってもいない状況も表すことができる。後者の場合は、プールの深さが校長の心において定まっていて、それを誇っているということ全体を否定のスコープとしたものである。RFT における否定の扱いは、稿を改めて論じたい。

であれ、見た目などからの推測であれ、ある程度正確に知っていた採用担当者の心に位置付けられる（採用担当者が太郎の年齢を全く知らなかったら、年齢で落とすことはあり得ない）。

(31) 太郎は年齢であの会社に採用されなかった。

#### 4.2. 潜伏命題名詞句が事実を表す理由と潜伏命題名詞句を項にとれる述語の特徴

N-意味理論の分析は、CPNP の表すものの意味論的タイプを命題としているが、そうとは考えにくいという問題があった。RFT では次のように分析する。「ドアの幅」のような RF の特質（ドア [幅]）または関係性に対応する表現は、特質または関係性の値が定まっていると考えられるコンテキストにおいて、単にその値（85 cm）になっている特質または関係性としてではなく、その事実《ドアの幅が 85 cm であること》に相当する解釈になる。そうなるのは、述語による強制（coercion）が働いているからだと考えられる。ただし、ここで強制しているのは叙実述語ではなく、「妨げる」のような因果関係を表す述語である<sup>25</sup>。

CPNP の述語は、「妨げた」「驚いた」「気に入った」など、いずれもその値がどうなるかを問題にしていない、換言すると、潜伏命題文では値の変異の可能性が問題となっていないという点も重要である。この点でこれらの述語は、「忘れた」「決める」「尋ねる」などのいわゆる潜伏疑問述語と異なる。西山（2013）の潜伏命題文の例（(12)(11)a-g）を見る限り、述語は「疲れさせた」「気に入った」「驚いた」「妨げた」と一見雑多で、潜伏疑問述語と違って値がどうなるかを問題にしていないという共通点はあるものの、「潜伏命題述語」を意味的に特徴付けることは難しそうに見える。しかし、いずれも因果関係を表し、CPNP が原因項を表すという共通性があることはこれまで指摘されていなかったようだ（この点でも潜伏命題文から除外した (11) f の「書いた」は異質であり、除外することが正当化される）。前述の通り、事実は因果的な力を持つ。例えば「妨げる」のガ格項にはそのことが求められるために、(12) の「ドアの幅」は事実を表すのである。なお、結果事態は、「気に入った」「誇っている」のようにある事態の成立が引き起こした心理的なものであることもある。

#### 4.3. 結果項を表す潜伏命題名詞句は可能か

西山（2013）の CPNP の例は全て原因項を表していた。筆者が新たに挙げた例も同様である。CPNP は原因となる事実しか表せず、結果となる事実を表わせないのだろうか。そもそも CPNP は、因果関係を表す述語の原因項であるために因果的な力を持つ事実を表すことが強制されているのであったから、結果項にはこの図式が当てはまらない。それでも結果の事実を表す例を作ってみると、次のようになる。

---

<sup>25</sup> CPNP は一種のメトニミーであると言える。述語による強制が起こっている点は、次例のような典型的なメトニミーと共通している。

(i) やかんが沸いている。（沸くのは固体のやかんではなく液体であるやかんの中身）

(32) ?インド亜大陸の衝突があのヒマラヤの高さを生み出した。(山田伸武 p.c.を改変)

筆者の語感では、述語の強制によりこの文の理解は可能だけれどもかなり不自然に感じられる。結果の事実を表す CPNP は、明らかに筆者の言語知識に定着していないと思われる。また、筆者にとって単純に定着していないだけでなく、CPNP の特徴と相容れない部分が結果項にはある。値が定まっていて、その変異の可能性が問題にならないということが CPNP の特徴に含まれているのに、因果関係の結果項であるということは、問題の名詞句の問題の値（ヒマラヤ [高さ:□] の□）が変わるということになるからである。さらに、この場合、「ヒマラヤの高さ」の値が高い方に限定されている点も、原因項の CPNP と異なる。例えば、(11) g (太郎はその部屋の天井の高さに驚いた。) は、天井が低くて驚いた場合の描写にも用いることができる点で (32) とは対照的である<sup>26</sup>。今後、詳しい調査によって意外にも (32) のような実例が多く見つかる可能性がないわけではないが、以下では、CPNP が結果項を表すことは不可能と想定する。

#### 4.4. 関係性の潜伏命題名詞句：値が独立 RF に対応するもの

西山 (2013) の例は全て、CPNP が RF の関係性ではなく特質に対応する例だったものの、関係性を表す名詞を主要部とした CPNP も可能である。例えば、大学教員の公募の書類審査に通過した太郎が推薦人を挙げることを求められ、最近その大学を退職した次郎を挙げたとしよう。しかし、次郎は実はその大学で極めて評判が悪く、太郎はそんな次郎を推薦人に挙げたために、落選したとしよう。その場合、次のように言うのは自然だろう。

(33) 太郎は推薦人で落選した。(田中太一、p.c.)

この「推薦人」は、太郎 RF の関係性《推薦人：次郎》に対応する。しかし、この名詞句は原因項をマークできる「で」(例 火事で死ぬ) でマークされていて、太郎が落選したことを引き起こした原因と解釈することは発話の最適の関連性に貢献するため、太郎の推薦人が（このコンテキストにおいては）次郎であったという事実を表すと解釈される。

次例も同様である。料亭での会食に連れて行かれた 4 歳児が、うな重と会席料理を頼んだとしよう。うな重と会席料理自体は何の変哲もないもので、特に驚くべきことはなくとも、次のように言うことは自然である。

(34) 4 歳の坊やの注文料理が、人々を驚かせた。(西山佑司、p.c.)

<sup>26</sup> なお、「高さ」のアクセントが関与的で、(32) では、「か」にアクセント核を置くことが可能であり、話者によってはその方が通常の「た」にアクセント核がある場合よりも自然でさえある。一方、低くて驚いた場合には、通常の頭高のアクセントに限られる（田中太一、p.c.）。

この場合、下線部は、4歳の坊や RF に含まれる関係性《注文料理：うな重、会席料理》に対応するものの、「驚かせた」の原因を表すガ格項であるため、人々が驚くことを引き起こした原因と解釈されるべく、彼の注文料理が（このコンテキストにおいては）うな重と会席料理だったという事実を表す。このように、関係性を表す名詞を主要部とした CPNP の存在は確かに認められる。

ただし、(34) は、上で排除した解釈——うな重と会席料理の重箱がびっくり箱だったというような解釈——も可能であるということは見逃すことができない。この場合、「4歳の坊やの注文料理」は CPNP ではなく、N-意味理論で指示的名詞句と言われるもので、RFT の分析では、4歳児 RF に含まれる関係性-リンク先《注文料理：うな重と会席料理》を経由して、リンク先の RF に対応する。当然、この場合にも、「驚かせる」という因果関係が表現されていて、うな重と会席料理自体が原因項であるということになる。モノそのものが原因となることは、形而上学的立場によっては受け入れがたいものであるが、日常的視座の認知形而上学的には、つまり、言語表現の背後にある日常的な因果の理解としてはそのようなものもあると考えられる。この解釈の場合には、「4歳の坊やの注文料理」を、値に直接対応する「うな重と会席料理」に置き換えることが可能である。

(34) うな重と会席料理が、人々を驚かせた。

こうすると、CPNP の解釈はできないことから、CPNP の解釈と指示的名詞句の解釈は明確に区別されるものであることがわかる。

指示的名詞句の読みは、CPNP ではないが、どのようにしてその解釈に至っているのかを次例を材料にして検討しておく。(35) a は、下線部が、父親が小泉純一郎であるという事実を表す CPNP の解釈と、小泉純一郎を指示する解釈がある。前者の解釈は b のようにパラフレーズでき、後者の解釈は c のようにパラフレーズできる。

- (35) a. 父親が小泉進次郎の出世を助けた。  
b. 父親が小泉純一郎であることが小泉進次郎の出世を助けた。  
c. 小泉純一郎が小泉進次郎の出世を助けた。

後者の解釈も b のようにパラフレーズできると思われるかもしれないが、厳密にはそれは不可能である。この「父親」のリンク先はこのコンテキストでは小泉純一郎 RF であるため、それを理解している聞き手は、父親は（元総理大臣の有力者）小泉純一郎であるという想定を想起して、発話の関連性を高める。これは、非明示的なレベルの理解（推意や含意）におけるもので、CPNP の議論において問題となっている明示的なレベルの理解（表意）ではない。したがって、それを明示したものは明示的なレベルのパラフレーズとして適切ではない。明示的なレベルで事実を表す CPNP の解釈を非明示的なレベルでその事実が理解される指示的名詞句の解釈に還元することはできないということである。



非明示的なレベルで理解される事実が想定し難い(33)も合わせて検討すると、理解が促進されるだろう。この場合、「推薦人」を「次郎」に置き換えると著しく容認度が下がる。

(33) ?太郎は次郎で落選した。

次郎が太郎の推薦人であるという事実で太郎は落選した、と理解するには、次郎 RF (ID a) に入っている〈a が太郎を推薦した〉のような内容特徴があると想定する必要がある、それには追加の処理労力がかかるからである。上述の通り、次郎が太郎を推薦したということは非明示的なレベルで理解されることであり、この場合、「次郎」は CPNP ではない。

関係性を表す名詞句が主要部の名詞句の場合、値を直接表す表現に置き換えると潜伏命題文と同様の理解ができないことは、次例のように特質を表す名詞が主要部の名詞句の場合と同様である。

(36) ??太郎は 79 歳で落選した。

(37) Cf. 太郎は年齢で落選した。

なお、(36) は、(35)c と対照的に、CPNP でない指示的名詞句の解釈をすることも難しい。なぜかという、「60 歳」は RF に対応せず、そのため、上の〈a が太郎を推薦した〉のような非明示的なレベルの理解で呼び出される内容特徴が見いだせないためだと考えられる。

関係性を表す名詞が主要部の名詞句は、どのような場合に CPNP の解釈が可能で、どのような場合に指示的名詞句の解釈が可能なのか。簡単にいうと、発話の関連性によるということになる。CPNP としての解釈が優勢である (33) では、「落選した」の原因を明示する「で」に問題の名詞句がマークされている。述語の表す因果関係も、原因の「で」がマークする名詞句が原因を表すということも明示的意味に含まれる（この「で」は原因項としての人を表す名詞句には付かないようである）。したがって、これらの名詞句は表意のレベルで事実を表す CPNP と解釈される。対照的に、(27)（校長先生が子どもたちの部屋からの脱出を妨げた）が、CPNP の解釈《[校長先生は太郎だ]》ということが、子供たちの部屋からの脱出を妨げた》ができないのは、その事実は、子どもたちの部屋からの脱出を妨げるという物理的な事態の原因とは考えられないからである。これらについては、脱文脈化したレベルでどちらの解釈が可能かを考えられるが、具体的なコンテキストを参照する必要があることもある。(34) では、注文した料理自体が驚くべきものであるか否かと 4 歳児がそれを注文した事実が驚くべきものであるか否かが、どちらの解釈になるかに関与的である。

特質-値も関係性-リンク先もそれを含む RF に依存するものであり (2.3.2)、この依存がなく独立に概念化される対象を表す名詞は、上で論じた強制が起こり得ないことから、CPNP の主要部にならないと予測される。以下の例を検討しよう。

(38) 新国歌の {a. 作曲者 / b. 作曲家} が、人々を驚かせた。

a の「作曲者」は N-意味理論の非飽和名詞（西山 2003: 6 章）である。RFT の用語では、新国歌 RF の関係性-リンク先に対応すると考えられる。そして、a は CPNP の解釈（作曲者が～であるという事実が…）が可能である。一方、b の「作曲家」は N-意味理論の飽和名詞であり、新国歌 RF の関係性-リンク先や特質-値に対応するとは考えにくい。そして、この場合は CPNP の解釈はできず、作曲家自身が何かすることで人々を驚かせたという解釈にしかならない。なお、飽和名詞（西山 2003、山泉 2013）の中でも、身体部位詞などの譲渡可能名詞は（他の RF に依存しない独立した RF に対応させることも可能ではあるが）、関係性-リンク先に対応するとも解釈できることから、CPNP の主要部になることが予想される。実際、次の例は、(8)（わたくしは、花子の年齢が気になる。）と同様の曖昧性があり、下線部は、潜伏疑問名詞句の解釈（候補者の左手がどのようなものであるか）も、CPNP の解釈（候補者の左手が～であるという事実）も可能である。

(39) 指輪の広告のモデルの採用面接官の太郎は、あの候補者の左手が気になる。

#### 4.5. 潜伏命題名詞句と節によるパラフレーズの解釈可能性の違い<sup>27</sup>

潜伏疑問名詞句とそれをパラフレーズしたものには、解釈可能性の違いがあることが知られている。例えば、(40) をパラフレーズした (41) は、ジョンがスミスを殺した者を同定したという (40) の解釈に加えて、ジョンはスミス殺しについて全く知らないが、“the murderer of Smith” で指示される者について、何らかの重要な事実を発見したという読みも可能である（Heim 1979: 53）。

(40) John found out the murderer of Smith.

(41) John found out who the murderer of Smith was.

この違いは、RFT では、(40) のような潜伏疑問名詞句の場合には、それに対応する RF の ID を定めたという発見だけを表せるのに対して、間接疑問節にパラフレーズした場合には、ID の決定を表すという解釈が可能だけでなく、“the murderer of Smith” に対応する RF の内容特徴の発見を表すという解釈も可能だと捉えられる。このような違いは、CPNP の場合とそれを節でパラフレーズした場合には見られないようである。CPNP においては、ID が既に埋まっているからである。

しかし、CPNP と節によるパラフレーズの間にも解釈可能性の違いがある。以下、それを示す例を検討する。(42) は、(43) のようには解釈できるけれども、事実の時制やモダリティが主節と異なる (44) a-b のようには、これらがありそうな事態であるにもかかわらず、解釈できない。

(42) A 社の株価が、私がその株を買うことをためらわせた。

<sup>27</sup> この節の内容は、田中太一氏・宮田瑞穂氏との議論に基づく。

- (43) A社の株価がその時点においてある値であったことが、私がその株を買うことをためらわせた。
- (44) a. A社の株価が(ためらった時点より)過去においてある安い値であったことが、私がその株を買うことをためらわせた。
- b. A社の株価が将来においてある安い値になるに違いないことが、私がその株を買うことをためらわせた。

述語の強制によって RF の中の特質-値・関係性-リンク先から事実を形成する際には、最小限の拡充が行われ、時制やモダリティを付け加えることができないようである。特質-値・関係性-リンク先という、元々時制やモダリティを含まないものから強制によって得られた事実であるからだと考えられる。

#### 4.6. まとめ：潜伏命題名詞句のスキーマと曖昧な例の分析

CPNP は、言語使用者が初めて接した場合でも、RFT が想定するような概念構造や語用論能力があれば適切に解釈可能であろう。そして、そのような名詞句の解釈が言語使用において繰り返されるのであれば、この解釈パターンはおおよそ以下の特徴を持つスキーマとして定着していると考えられる。

- (45) 統語：NP<sub>1</sub> - 意味：事実《RF の特質<sub>1</sub> 値または関係性<sub>1</sub> のリンク先の RF の ID が a であること》(添字<sub>1</sub> は NP の主要部の語彙的意味による対応を表す)
- 非言語的コンテキスト：RF の特質値または関係性のリンク先の RF の ID<sub>1</sub> が問題の位置付けにおいて定まっている。(i.e., [特質<sub>1</sub> : a] または《関係性<sub>1</sub> : (ID) a》)
- 言語的コンテキスト：形式的には述語は NP<sub>1</sub> を項に取るが、意味的には特質<sub>1</sub>・関係性<sub>1</sub> の値がどうなっているかを問題にしない。その述語は、NP<sub>1</sub> に対応する項が因果的な力を及ぼす状況を表す。

このスキーマは、名詞句の解釈パターンであるけれども、非言語的コンテキストの特徴を必要不可欠な部分として含む。このことは、次に立ち戻る潜伏命題文と潜伏疑問文で曖昧な例 (8) を考えると、明らかである。

この解釈パターン——特質/関係性の表現を、その値が定まっているコンテキストにおいて、事実《特質/関係性を持つ対象のその特質/関係性の値はその値だ》と解釈するパターン——は既存の RFT の道具立てで十分特徴付けられる。したがって、CPNP という名詞句のカテゴリーを新たに理論に導入する必要はない。もっとも、このパターンで解釈される名詞句を「潜伏命題名詞句」(あるいは「潜伏事実名詞句」と呼ぶことは、特にこのスキーマが定着・慣習化している場合、有意義な一般化を捉えているだろう。

CPNPの説明に限らず、一般に、変項名詞句という N-意味理論の概念も RFT には必要ない。2つの理論を比較するために、N-意味理論が変項名詞句と呼んでいるものという意味で「変項名詞句」という語を用いているが、RFT の枠内における現象の記述においては、この概念は不要で、異なる分析がなされる（例えば、N-意味理論で変項名詞句とされている倒置指定文の主語名詞句を、Yamaizumi 2019、山泉 2020b が RFT の枠組みで分析している）。

RFT では、倒置指定文（山泉 2020b）と同様、CPNP も第一義的には動的な解釈パターンとして特徴付けられる。これは、どちらも静的な言語知識として特徴付ける N-意味理論とは対照的である。RFT の観点は、通常の言語使用を分析する場合だけでなく、言語の動態を捉える際にも有効である。CPNP を意味論のレベルにおいて静的な言語知識として捉えた場合、CPNP が容認されなかった言語で広く使われるようになるというあり得るプロセスを捉えることはできない。RFT の分析は、そのようなプロセスを、スキーマが定着した話者の増加として捉えることができる。

なお、N-意味理論は「非標準的潜伏疑問文」と、それと並行的な「非標準的潜伏命題文」というものがあるとしている（西山 2013）。これについては、「非標準的潜伏疑問文」についての山泉（2021a）の議論が正しければ、検討する必要はない。「非標準的潜伏疑問文」というカテゴリーは、N-意味理論の標準的潜伏疑問文の特徴付け（三位一体説、山泉 2019）があてはまらないものを分類するためのものである。しかし、西山（2013）が挙げている非標準的潜伏疑問文の特徴付けは、そこで挙げられている例さえこのカテゴリーに入ることを保証できない不十分なものである（山泉 2021a）。さらに、三位一体説には、体系的な反例があり、一般性を欠く（本稿 3.2 の 4 つ目の疑問でその一端を紹介した）。そのため、RFT のように三位一体説を前提としなければ、非標準的潜伏疑問文というカテゴリーの必要性は認められない。以上の議論が正しければ、これと並行的に、標準的潜伏命題文と非標準的潜伏命題文の区別もする必要がない。“非標準的”潜伏命題名詞句は、本論文で扱った“標準的”潜伏命題名詞句と同様に RFT で分析できるということである。

まとめとして、潜伏命題文と潜伏疑問文で曖昧とされた (8) (わたくしは、花子の年齢が気になる。) の RFT による分析を示す。両者の違いは、「花子の年齢」に対応する特質の値の違いに対応する。特質 [年齢: □] の値が問題の位置付けにおいて定まっている場合にはこの名詞句は CPNP となる。一方、その値が定まっていない場合には潜伏疑問文の読みとなる。

(46) (潜伏疑問文では x、潜伏命題文では a)

「花子の年齢」ONT 値 / @聞き手 > 話し手 / CNT 花子 b [年齢: x/a] ; <話し手は花子 [年齢: x/a] の x/a の値が気になる>

「気になる」が表す事態の経験者である「わたくし」が花子の年齢を知っていれば潜伏命題文の読みにしかならず、知らない場合は潜伏疑問文の読みにしかならないことがこの分析を裏付ける。潜伏命題文の場合には、前述の通り値の変異の可能性が問題となっていないが、「気になる」は変異の可能性を問題とすることもできるため、両方の読みが可能になるのである。

なお、N-意味理論ではこの違いは意味論的曖昧性とされているが、RFT ではそうならない。[年齢：x] であるか [年齢：a] であるかは、この文の言語表現がコード化する意味（概念構造へのインタフェース制約）の違いによるものではないからである。「気になる」の概念構造への制約としては、x か a かは未決定で、「気になる」の意味が、潜伏疑問の場合は知りたくなるということ、潜伏命題の場合は差し障りを感じるということになるという違いは、[年齢：x] のときの気になり方と [年齢：a] のときの気になり方の違いから導かれるだろう。

## 5. 特質・関係性の値の明示可能性と値が独立した RF に対応するか否かの 相関

RFT の分析では、CPNP は 2 種類に分けられることになる。名詞句の主要部が字義的には関係性（例「推薦人」）を表すものと特質を表すもの（例「年齢」）である。両者の間には、値が独立した RF に対応するかないかという違いがある。以下では、値を CPNP と共に明示できるかどうかということを検討して、がこの区別は、RFT の枠組みを抜きにしても正当化されるものであることを示す。この現象は、N-意味理論では指摘されていなかったものであり、これを説明することで、N-意味理論のさらに先に行くことを目指す。

西山（2013）では指摘されていないことだが、以下のように CPNP はその値の表現と共起できることがある。

(12)' 85 cm {の/である/という} ドアの幅が子供達の部屋からの脱出を妨げた。

(11)' a. その箱は、入れた荷物の 30 kg {の/である/という} 重さのために底が抜けた。

これらには、明示された値が独立した RF に対応しないという共通性がある。一方、値が独立した RF である関係性の CPNP は、値を明示することが難しい。できるとしても、値と CPNP をつなぐ形式が上の場合よりも制限されていて、「という」であれば辛うじて可能かもしれないという程度である。

(33)' 太郎は次郎 {\*//\*である/?という} 推薦人で落選した。

(34)' {うな重と会席料理 {\*//\*である/?という} 4 歳の坊やの注文料理が、人々を驚かせた。

ここでは、4.4 で論じた指示的名詞句の解釈ではなく CPNP の解釈における容認度を検討していることに注意されたい。指示的名詞句の解釈は、「である」の場合に可能と筆者には感じられる（筆者の容認度は指示的名詞句の場合は {\*//?である/\*という}）<sup>28</sup>。

<sup>28</sup> 次例のように（ ）を使えば、CPNP の解釈も指示的名詞句の解釈も可能であろう。

(i) 4 歳の坊やの注文料理（うな重と会席料理である）が人々を驚かせた。（田中太一 p.c.）

CPNP はこのような違いから 2 種類に分けられ、その違いが、値が独立した RF に対応しない特質と対応する関係性という概念で捉えられるため、特質の CPNP と関係性の CPNP に二分することが正当化される。このような区別をする道具立ては、N-意味理論にはないようで、この点でも RFT の分析の方が優れている。

### 5.1. 他の構文における値の明示可能性と値が独立した RF に対応するか否かの相関

値が独立した RF に対応するか否かという、RFT のもたらす視点は、CPNP 以外の名詞句、特に N-意味理論が変項名詞句としているものにも、新たな光を投げかける。

倒置指定文も変項名詞句が関わると N-意味理論で言われるものである。倒置指定文を名詞修飾節にした場合、上と類似の現象が見られる。(47) (48) のように倒置指定文を装定の形にすることは一般に難しい(西川 2013: 100)、あるいは一般に不可能だ(西山 2013: 113)と N-意味理論で言われている(他の枠組みでも岸本 2012: 54 に類似の記述が見られる)。

(47) 犯人は太郎である。→ 太郎 {a. \*の/b. ??である/c. という} 犯人

(48) 大統領はオバマである。→ オバマ {a. \*の/b. ??である/c. という} 大統領

なお、c の「という」は表現自体は自然であるが、倒置指定文ではなく措定文を名詞修飾をしたものになり、「太郎」という名前の犯人、という意味になる。実際、この場合には、名前を鉤括弧に入れることが自然になる。

N-意味理論で「一般にに難しい・不可能」と言われていることも、(49)(50)のように値が独立した RF に対応しない場合にはあてはまらない。

(49) 機材の値段は 100 万円である。→ 100 万円 {a. の/b. である/c. という} 機材の値段

(50) 東京-新大阪間の所要時間は 2 分半である。→ 2 分半 {a. の/b. である/c. という} 東京-新大阪間の所要時間

倒置指定文についても、値が独立した RF か否かが関与的な現象が観察されると言える。

次のペアの容認度の差も、固有名詞の方が独立した RF に対応させやすいことから説明できる。

(51) a. ??太郎である花子の兄

b. 花子の兄である太郎

(51) a は、「太郎」が独立した RF に対応するため、上の例と同様容認度が低い。それに対して b は、「花子の兄」が独立した RF ではなく太郎 RF の内容特徴(〜が花子の兄だ)を表すと解釈しやすい。

その場合、ここで問題としている独立 RF によって値を定めるといことが行われぬ。そのため a のような問題はないということである。

一方、「兄」を独立した RF に対応しない「年齢」に変えると、容認度が逆になる。

- (52) a. 60 歳である花子の年齢  
b. ??花子の年齢である 60 歳

60 歳という値にアクセスするにはその特質 [年齢] にアクセスできている必要があり、その特質にアクセスすることの前提として、それを含む RF 全体にアクセスできている必要がある。しかし、b のように「60 歳」の修飾節で RF と特質に言及すると、その前提が満たされていないように感じられるのかもしれない。以上の点でも特質の表現と関係性の表現は対照的である。

次に、潜伏疑問叙述文を検討する。潜伏疑問叙述文とは、変項名詞句の特徴をもった潜伏疑問名詞句を主語にし、主語名詞句について「明らかだ」「不明だ」「秘密だ」「重要だ」などの属性を帰している「A は B (だ)」という構文で、「一見、措定文に近い面もあるが、標準的な措定文とは本質的に異なる新しいタイプのコピュラ文」(西山 2013: 378) とされる。潜伏疑問叙述文で疑問の答えにあたる値を下線部の表現によって明示してみると、値が独立した RF である場合 (53) には容認できなくなる。主語名詞句に (47)(48) のような独立した RF である値を定める倒置指定文が埋め込まれているからと考えられる。

- (53) 白鵬 {a. \*の/b. \*である/c. \*という} 今場所の優勝者は明らかだ。<sup>29</sup>

ここでは深入りしないが、「明らか」という属性は人に帰すことはできない。したがって、(53) のような潜伏疑問叙述文においても、述語による主語名詞句への強制が働いていると考えられる。一方で、値が独立した RF に対応しない場合は、「という」を使って値が明示できる。

- (54) 巨人の 4 連勝 {a. \*の/b. \*である/c. という} 今度の日本シリーズの結果はやる前から明らかだ。

ただし、(54) は上述の強制を認め難いという点で (53) とは異質で、同じ潜伏疑問叙述文と考えてよいのか疑わしい。

潜伏疑問文については話が複雑である。潜伏疑問名詞句の部分が独立した RF に対応するかしないか、その値を明示するかしないかで、4 通りを検討する必要がある。次例は、独立 RF に対応し、値を明示しない例である。

<sup>29</sup> この文の「白鵬である」を「白鵬という」にしても容認度が上がらないのは、この文は述語が「明らかだ」の潜伏疑問叙述文で、主語名詞句が指示的名詞句になり得ないからである。

(55) 太郎は花子の好きな作曲家に関心がある。(西山 2003: 97)

しかも、この例は曖昧で、「花子の好きな作曲家」を潜伏疑問名詞句とする読み（「花子の好きな作曲家」≡「誰が花子の好きな作曲家か」）だけでなく、「花子の好きな作曲家」で例えばバッハを指示するような、指示的名詞句とする読みも可能である。以下のように値を明示すると、潜伏疑問文の読みはできなくなる。ここでの主題ではないが、指示的名詞句の読みは、値の明示の仕方によっては可能で、「という」を使うと可能だが、「である」を使うと不可能である。

(56) 太郎はバッハ {の／である／という} 花子の好きな作曲家に関心がある。<sup>30</sup>

- a. 潜伏疑問の解釈：\*の／\*である／\*という
- b. 指示的名詞句の解釈：\*の／\*である／ok という

値が独立した RF に対応しない場合はどうかというと、値を明示しない場合、潜伏疑問の解釈（≡太郎は花子が何歳かに関心がある）は可能である。

(57) 太郎は花子の年齢に関心がある。

指示的名詞句の解釈、つまり、太郎が花子の年齢を知っていて、60 歳などの値そのものに関心があるという解釈は、値を明示してもしなくてもできないだろう。そもそも、RF に対応しない値そのものに関心があるということは不可能だからである (2.3.2) <sup>31</sup>。値を明示する場合、潜伏疑問の解釈は「という」では不可能だが、「である」ならば、やや不自然だがかろうじて可能である。

(58) 太郎は花子の 60 歳 {??の/?である/\*という} 年齢に関心がある。

したがって、疑問埋め込み述語の目的語においても特質の値を明示することが全くできないわけではない。

(59) (60) は、潜伏疑問文の述語の種類による違いもないことを示そうとしたものである。

(59) #太郎は花子という犯人を {a. わざわざたずねた／b. 知っている／c. 推測した}。

---

<sup>30</sup> 主節の述語が「気になる」の場合には、潜伏疑問の解釈と潜伏命題の解釈で曖昧になる。

(i) バッハが嫌いな太郎はバッハ {の／である／という} 花子の好きな作曲家が気になる。

潜伏疑問の解釈：\*の／\*である／\*という

潜伏命題の解釈：\*の／\*である／ok という

<sup>31</sup> 花子の年齢が特定の値であることで太郎が花子に関心を持つことは当然考えられるが、その場合は、次のように表現されよう。

(i) 太郎は、花子に 60 歳という年齢に関心がある。



(60) 太郎は 25℃というプールの水温を {a. わざわざたずねた/b. 知っている/c. 推測した}。

述語が疑問埋め込み述語 (a) でも、叙実述語 (b) でも、resolutive 述語 (c、註 18 参照) でも、値が独立した RF に対応する(59)は、「花子という」で値を明示すると、ない場合から意味が大きく変わってしまう。例えば、(59)a「花子という」がなければ訊いたということだが、ある場合は訪問したということになってしまう。そのような値を明示することによる意味の変化は、(58) には見られない。

変項名詞句が関わると N-意味理論で言われている絶対存在文においても、値を明示すると変項の値が独立した RF である(61)は容認度が大きく下がる一方で、値が独立した RF でない(62) ではそのようなことはない。

(61) ??太郎である 100m を 8 秒で走れる人が存在する。<sup>32</sup>

(62) 69 連勝という相撲の連勝記録が存在する。

100 m を 8 秒で走れる人が太郎であることは、発話の関連性を明らかに高めると考えられる。それにも関わらずそのことを追加すると発話の容認度が下がることは説明を要する。これまで観察してきた他の文についても同様である。RFT の観点からそうなる原因を次節で考察する。

## 5.2 なぜ独立 RF の値は明示できないのか

以上で観察してきたように、独立 RF の値は、明示できない、あるいは極めて明示しにくい。このことの説明として、RF の ID を定めることは文の中心的な、いわゆる新情報として表現する必要があるという制約を提案する。一方、独立した RF に対応しない特質値に関してそのような制約はない ((11)'(12)'). この制約はいかにして正当化されるのか。言語は、OIC において聞き手の心的状態を操作することを固有機能とし、話し手は言語表現の使用によって聞き手にの心にある RF に対する様々な操作を促す (2.1)。その中で RF の ID を明示的に定めることは文の中心的認知効果であるのが自然である。なぜなら、ID が定まって初めて RF は世界と関係を持ち、それへの情報が直接的な関連性を持つようになるからである。そのため ID を定める情報は最優先され、その表現が前景化された形で表されるという情報構造が慣習化していると考えられる。しかし、「～という」「～であ

<sup>32</sup> 「である」を「という」にすると容認度が上がる。

(i) 太郎という 100 m を 8 秒で走れる人が存在する。

N-意味理論では、(i) の「太郎」を指示的名詞句とするなら、主語名詞句全体を変項名詞句と考えることはできないだろう。そうだとすれば絶対存在文にはならない。この文は、場所辞を補う必要がないように筆者には感じられるが、そうだとしたら、絶対存在文ではないのに何故そうなのかかが問題となり得る。「太郎」を叙述名詞句とすると、それで変項名詞句を修飾できるのかが問題となる ((53)b はそれをした結果、容認できない文になっている)。なお、RFT ではこの場合、〈～が「太郎」である〉〈～が 100 m を 8 秒で走れる〉という内容特徴を持った RF を聞き手の心に導入すると分析できる。

る」という形の名詞修飾部は、少なくとも上の例においては新情報と慣習的に結びつく部分ではない。そのため(33)' (34)' (47) (48) (53) (56)a (61)などでは、ID の値を定めるという RF の変化が発話の中心的認知効果をもたらすとは受け取られず、容認度が低いのではないか。

一方、次例下線部のように ID が定項の RF の内容特徴を表す場合は ID を定めているわけではないため、問題ない。

(56)' 太郎は花子の好きな作曲家であるバッハに関心がある。

対照的に、(51)a (??太郎である花子の兄) は、「太郎である」が、背景化された情報を表す部分であるのに兄 RF の ID を定めると解釈されるために容認度が低いと考えられる。「太郎である」が兄 RF の内容特徴としての名前を表すと考えれば容認できそうではあるものの、ここでも ID を定めることがそれより優先されるため、内容特徴と解釈することはできないのだろう。「である」の代わりに「という」を用いれば、内容特徴の名前を表すと解釈することができる。(47)b (??太郎である犯人) も「太郎という犯人」にすれば自然になり、そうなる事情も同様と考えられる。

また、(63)(64) が示すように、ID が null 値であるか否かも文の中心的な新情報として表されなければならないようだ。この制約がある理由も同様と考えられる。つまり、ID が null 値かどうかは、RF が世界と関係を持ち得ないかどうか直結し、null 値であるとその RF への情報は直接的な関連性を持ち得ない。そのため、ID が null 値かどうかの情報も最優先され、その表現は前景化されることが慣習化されているのではないだろうか<sup>33</sup>。

(63) a. \*存在しない人が 100 m を 2 秒で走れる。

b. 100 m を 2 秒で走れる人は存在しない。

(64) a. \*存在する人が 50 m を 6 秒未満で走れる。

b. 50 m を 6 秒未満で走れる人が存在する。

このように、RFT の概念装置は、様々な言語現象の分析に有効である。

## 6. 結論

N-意味理論は、潜伏命題文という興味深い現象に注目したが、CPNP を値が埋まった変項名詞句とする分析は多くの疑問を残すものであった。RFT は、CPNP は独立した RF に対応せず、定まった値を持つ特質に対応し、因果関係を表す述語の強制によって事実を表すと分析する。そうすること

---

<sup>33</sup> 英語の *there is* だけの関係節は、この説の反例となり得るが、かなり用法が限られているようである。その制約を本文で述べた観点から検討していく必要がある。また、*Nothing* は ID を null 値にすることを述語や否定辞に頼らず、NP だけで行っていて、反例となり得る。ただし、*nothing* は日本語に直接対応するものがなく、しかも、これだけ大量の借用が英語から行われていても、全く取り入れられていないことは注目に値する。このことは、*nothing* の意味が極めて特殊であることを示唆し、どう特殊であるかの説明を RFT は与えられる可能性がある。

でN-意味理論の分析にあったような問題は解消した。また、値が独立したRFに対応するか否かという観点、N-意味理論が変項名詞句の概念によって分析していた他の多くの構文についても関与的であり、新たな言語事実を説明できる。以上の議論によって、RFTがN-意味理論に対していくつかの点で優位性があること示した。

## 参考文献

- Burke, Luke (1952) On the tunnel effect. *Quarterly Journal of Experimental Psychology* 4: 121–138.
- Castroviejo-Miró, Elena (2006) *Wh-exclamatives in Catalan*. Ph.D. dissertation, Universitat de Barcelona.
- Castroviejo-Miró, Elena, and Schwager, Magdalena. (2008) Amazing DPs. In: Tova Friedman and Satoshi Ito (eds.), *Proceedings of the 18th Semantics and Linguistic Theory Conference*, 176–193.
- Culicover, Peter W., and Jackendoff, Ray (2005) *Simpler syntax*. Oxford: OUP. Kindle edition.
- Ginzburg, Jonathan, and Ivan Sag (2001) *Interrogative investigations*. Stanford, CA: CSLI.
- Heim, Irene. 1979. Concealed questions. In R. Bäuerle, U. Egli, and A.v. Stechow (eds.), *Semantics from different points of view*. Berlin: Springer Verlag, pp. 51–60.
- Jackendoff, Ray (1992) *Languages of the mind*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Pustejovsky, James (1995) *The generative lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Yamaizumi, Minoru (2019) A cognitive-pragmatic account of specificational sentences. Poster presentation at the 15th International Cognitive Linguistics Conference. Kwansei Gakuin University, 8 August 2019. (<https://app.box.com/s/509mijaa03vti4judljyza0jc8e1k02w>)
- 天野みどり・三宅知宏・大木一夫 (2019) 「展望 1」『日本語文法』19(1): 90–97.
- 今井邦彦・西山佑司 (2012) 『ことばの意味とはなんだろう—意味論と語用論の役割』東京：岩波書店.
- 上山あゆみ (2015) 『統語意味論』名古屋：名古屋大学出版会.
- 梶浦恭平 (2013) 「「よい」の曖昧性とアドホック概念構築」西山 2013: 471–495.
- 岸本秀樹 (2012) 「日本語コピュラ文の意味と構造」影山太郎 (編)『属性叙述の世界』39–67. 東京：くろしお出版.
- クーン, トーマス (中山茂訳) (1970/1971) 『科学革命の構造』東京：みすず書房.
- 熊本千明 (2018) 「潜伏感嘆文の意味特性について」『佐賀大学全学教育機構紀要』6: 43–61.
- ジャッケンドフ, レイ (郡司隆男訳) (2002/2006) 『言語の基盤—脳・意味・文法・進化』東京：岩波書店.
- ジャッケンドフ, レイ (大堀壽夫他訳) (2012/2019) 『思考と意味の取扱いガイド』東京：岩波書店.
- スコット＝フィリップス, トム (畔上耕介他訳) (2015/2021) 『なぜヒトだけが言葉を話せるのか：コミュニケーションから探る言語の起源と進化』東京：東京大学出版会.
- 鈴木生郎・秋葉剛史・谷川卓・倉田剛 (2014) 『ワードマップ 現代形而上学：分析哲学が問う、人・因果・存在の謎』東京：新曜社.

- スペルベル, ダン・ウィルソン, ディアドリ (内田聖二他訳) (1995/1999)『関連性理論—伝達と認知』  
(第2版) 東京: 研究社.
- 戸田山和久 (2004) 「心は (どんな) コンピュータなのか」 信原幸弘 (編)『ロボット篇』, シリーズ  
心の哲学Ⅱ. 27-84. 東京: 勁草書房.
- 西川賢哉 (2013) 「「NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>」タイプD'とタイプF」 西山 2013: 83-101.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』 東京: ひつじ  
書房.
- 西山佑司 (2007) 「名詞句の意味機能について」『日本語文法』7(2): 5-19.
- 西山佑司 編著 (2013) 『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る』 東京: ひつじ書房.
- 西山佑司 (2019a) 「意味の科学から言語理論への3つの問題提起」 第108回慶應意味論・語用論研究  
会. 慶應義塾大学、2019年4月6日. 発表資料.
- 西山佑司 (2019b) 「チョムスキー理論と哲学: 方法論的自然主義と内在主義」 慶應言語学コロキア  
ム「生成文法理論: その総括と課題—訳書『チョムスキーの言語理論』(2019)を踏まえて」ハ  
ンドアウト. (<http://www.icl.keio.ac.jp/colo/2019/11/25/handouts092829.pdf>)
- 西山佑司 (2020) 「二つのタイプのウナギ文」『日本語文法』20(1): 3-19.
- 西山佑司・西川賢哉 (2018) 「指定文の分析において「中核名詞句」なる概念はどこまで妥当か」『言  
語研究』154: 177-192.
- 西山佑司・峯島宏次 (2006) 「叙述名詞句と語用論的解釈」 飯田隆 (編)『西洋精神史における言語と  
言語観—継承と創造』21-50. 東京: 慶應義塾大学言語文化研究所.
- フォコニエ, ジル (坂原茂他訳) (1984/1996)『新版 メンタル・スペース—自然言語理解の認知イン  
ターフェイス』 白水社.
- マスターマン, マーガレット (中山伸樹訳) (1970/1990) 「パラダイムの本質」イムレ・ラカトシュ、  
アラン・マスグレーヴ編、森博監訳『批判と知識の成長』87-130. 木鐸社.
- 峯島宏次 (2013) 「変項名詞句の階層」 西山 2013: 407-430.
- ミリカン, ルース・ギャレット (信原幸弘訳) (2002/2004) 『意味と目的の世界』 東京: 勁草書房.
- 山泉実 (2019) 「名詞句の“自由拡充”が抱える問題とその根源」 日本科学哲学会第52回大会口頭発  
表. 慶應義塾大学、2019年11月10日.  
(<https://app.box.com/s/fxwmjdi4okno2rfvb4dripwe5ao8u1dl>)
- 山泉実 (2020a) 「「並列名詞」とそれが主要部になる名詞句: 両者の意味の関係と語彙的特徴」 形態  
論・レキシコンフォーラム2020 口頭発表. オンライン, 2020年9月12日.  
(<https://app.box.com/s/94vrvzljioiek6seh4mj30bb0lq4sfmxf>)
- 山泉実 (2020b) 「指示参照ファイル理論序説」『日本語・日本文化研究』30: 1-28. 大阪大学言語文化  
研究科日本語・日本文化専攻.
- 山泉実 (2020c) 「認知的視座からの意味論と形而上学」『日本語・日本文化研究』30: 29-52. 大阪大学  
言語文化研究科日本語・日本文化専攻.

山泉実 (2021a)「潜伏疑問名詞句再考：N-意味理論の分析の批判的検討」『言語文化研究』47: 101–121.

大阪大学大学院言語文化研究科.

山泉実 (2021b)「変項名詞句の階層を再考する—N-意味理論の分析の批判的検討と指示参照ファイル理論による分析—」『東京大学言語学論集』43: 電子版 49–75.

山泉実 (近刊)「視座を俯瞰した認知的メタ形而上学の試み—構成のアンチノミーをめぐって」『EX ORIENTE』27.

(やまいずみ・みのる 大阪大学)